
真・恋姫?無双 霞√

甘露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 霞✓

【Nコード】

N4071X

【作者名】

甘露

【あらすじ】

転生一刀君、正妻霞さんなお話です。

アンチ一刀君、反ご都合主義な方は不快な思いをされると思われますので閲覧しないようお願いします。

分類は戦記ですが、本格的に三国志入るのは3章以降となります。

TINAMIでアカウント規制を受けたのでこちらで仮投稿です。
なのでアカウントが戻り次第更新を停止すると思われます。

一章まづめ

始点

流星が、“一人”の少女と出会う。

そこから紡がれる物語は、果たして真か虚か。

『外史』

三国志より生まれし、夢現の物語。

これから貴方が見るのは、とある夢の欠片。
愛し愛され共に歩んだある奇特な外史の物語。

変わり者と揶揄された女は男の為に武を奮い、心を閉ざした男は
女の為に智を奮った。

そんな、一組の男女の物語。

さあ、扉は開かれました。
旅立ちましょう。光の先にある、外史の発端へ。

瞬く流星と共に――

＊＊

花の都の遙か千里の彼方。

北方の地の果て、并州太原郡に俺は二度目の生を受けたらしい。

らしい、という推測の言葉が付くのは俺が生まれた環境が最底辺だった故、何も分からなかったのだ。

周囲も、時代も、世界も、場所も。

両親はどちらも東洋系で、文字は漢字と象形文字を二で割ったようなモノだけだったから、何となく中国辺りかなと見通しが付いてはいたが。

それでも中国4000年の歴史、という長い長い間の中でどの辺りかと問われれば、文化や生活水準は少なくとも21世紀じゃ無いな程度にしか分からなかった。

漢文は嫌いだったから、起きた出来事を聞いても知ってるものは無かったし。

二度目の両親は、現代風に言うところの見境なしのDVオヤジに、オヤジからの暴力に耐え、それを俺にぶつける娼婦のおふくろだった。

そんな所にまともな資料も文学も地図もある訳がない。

結果として俺は若干1歳3カ月で文字を覚える練習をする羽目になり、それが両親の目に止まり仇となり2歳で働かされ始めた。

（どうやら文字が読めるというのは、大変なスキルになるらしい。識字率は見た所精々3割だった）

労働の収穫と言えば、ここには人権と言う言葉は無いらしいと言うことと、人間は使い捨ての労働力扱いだ、ってこと位だった。

あと少し同年代よりは体も丈夫になった。

この、二度目の故郷が并州太原郡、というらしい情報も又聞きと、看板と値札と知ってた漢字の組み合わせでなんとか覚えた文字か

ら断片的に得た情報でしかない。

因みに地図はとても貴重な品らしく、少なくとも市場では扱ってなかった。

并州太原郡が何処にあるのかはさっぱり分からない。精々冬が早いから北にあるんだな、程度の認識だ。

さて、物心ついた頃から働かされている雀の涙程の俺の稼ぎはオヤジの酒代に消え、怒声と罵声と悲鳴と拳が飛び交う六畳一間。

こんな最低な環境でも、俺はこの両親の元を離れなかった。

典型的なスラム街である引き戸一枚向こうの世界よりは、死ぬこと無く体を休ませられる保障があったからだ。

それに、俺は弱かった。知識だけが先走っているが、体は精々6、7歳だ。

外に放り出されたら、とても生き抜けない自信があった。心は機械文明の恩恵に肩までどっぷりつかった日本の高校生だったから、というのもあると思う。

だから、とにかく俺は親父とおふくろに縋り続けた。

どこかに俺を思う気持ちがあるのだと信じて。俺を自分達の子だと思い、何処かに愛があるのだと信じて。

俺は、別にトラックにはねられた訳でもなければ、神様のものにあってチートを授けられた訳でもない。

朝起きて、8時半だやべえと家を出て、気付いたら俺は怒鳴られ殴られる日々に晒された1歳の男の子だった。

前世ではそれなりに普通の高校生として生きてきただけだった俺に、二度目の生は端的に言って衝撃だった。

常識は常識では無く、文明の恩恵を受けられることの幸運を思い知った。

如何に普通が恵まれているか。

教育を受けられたことがどれだけ幸福なことなのか。

毎日の食に困らないことがどれほどの奇跡なのか。

俺は初めて知った。

前の世の産みの親にいくら感謝してもし切れない程の恩を感じ、涙したことも一度や二度では無い。

そして、愛をまるで注がない今の両親に、殺意を覚えるまでに大して時間はかからなかった。

それでも俺は親父とお袋に縋り続けた。まだ俺を思う気持ちが欠片程でもあるのだと信じて。

率直に言って、というか言うまでも無いが今の産みの親(?)は最低だ。

誰かれ構わず殴り散らす暴力癖のオヤジに、やり場の無い感情を一人息子に遠慮なくぶつけ発散し続けるおふくろだ。

そして、当然最も弱い俺は誰にもぶつける事無く全てをため込み続けた。

曲解された最底な儒教社会らしいこの二度目の世では、歳の多さこそがモノをいう世界だった。

つまり子供の俺は何よりも弱かった。力でも、立ち場でも、生き物としても。

そしてこんな概念もまかり通っていた。

「額に汗して働いた収穫を、『徳』を以て手に入れる。」

意識すれば、「額に汗して働いた者の収穫を自らの手に入れることは、その人に徳があるから」となる。

そしてその主張は、弱い俺に暴力となって降りかかった。

得られない弱い俺は、徳が無いから得られないのだ、搾取されるのは徳が無いから奪われるのだ、という事になっていい様に稼ぎを搾取され続けた。

まるで何かから逃げるようにそう呟き続けるオヤジとおふくろを、俺は何処か憐みを込めた目で見つめた。

もちろんその直後に徹底的に殴られた。

でも、俺はオヤジとおふくろを求めた。庇護者として、唯一の血縁として。

でも、終わりだ。

今日で全てが終わる。

これまでの六年間の記憶が溢れ出てきたが、それも終わりだ。

『ねえ、父様は、母様は俺を必要としてるの？』

きっかけはこんな質問だった。

ふと、何を思ったか口からこぼれた質問。しかし、六歳がするには重すぎる質問。

俺は、やはり縋りたかったらしい。助けが欲しかったらしい。

半端に自我がある分、自分の存在を認めて欲しかったんだ。

いつもなら殴られるから絶対しないだろう質問。でも、その日の

両親は何故だか機嫌が良かった。

だから俺もどこか甘えがあったんだろう。ぽろり、と口からその質問はこぼれた。

だが、帰ってきた答えは俺の心を殺した。

『殴れば金を運んでくるんだ、死なれるにや惜しいから必要だ』

俺は、俺が壊れるのを感じた。

ため込んだ感情のダムが決壊した、やり場の無い負の想いが俺の心を埋め尽くした。

両親ですらこうだ。シンライナシテ、ソシナノハウソダ。
イヤダ、ソシナセカイデイクタクナイ。

その晩、俺は両親の前から姿を消した。

＊＊

「なーなー、アンタなにしとるん？」

「……」

不意に掛けられた、女の声。

クソ溜めの中ですら最下層の群れを組まない孤児。俺は傍から見ればそう見える。

そんなのに声をかける女なんて、どんなモノ好きか狂人か。

俺は精々そいつから飯のタネでも得ようと思い振り返った。

——それが、全ての始まりだった。

五年間、俺は生き抜いた。

飛び出した最初の一年は文字通り泥水を啜り、残飯を漁り、何度も高熱と下痢と暴力で死にかけながら。

空腹の余り、人の死肉すら喰らおうと思った事も一度や二度ではない。

でも、その一線だけは超えなかった。

あの死体を喰らう野良犬と同等になりたくないから、何より両親の様に、畜生の様な生き様を晒したくなかった、という無駄な我儘の産物だ。

それでも五年間、今まで生き抜いた。

十歳、三年目だ。

泥を啜った二年でさらにやせ細った体躯。前の俺に何処となく似てきた顔。

但し目だけは比べ物にならない位に、暗く鋭くなっていた。

纏う衣服はゴミから拾い集めた、比較的きれいな布で作ったボロ服が一枚。

なんとか人間らしく見られる為に、日銭や飯を得る為に身なりだけは低水準を維持するようにしていた。

スラムの一番奥、ほぼ全裸で横たわるだけの連中の様になっては、モノを喰うことすら覚束なくなる。

そういうことも俺は学んだ。世界に絶望しても、人間を止めたくは無かったからだ。

だから、少しづつ出来る事をし、人間らしく見られるようにだけ

はした。

そうやって、俺は四年目になる頃、何度も不条理に奪われながら学び続け、俺は生き抜く術を得た。

人の流れを窺うことと、人の欠陥を見つける事だ。

前者は、如何に生き延びるか。それに大きく関わる。

端的に言えば、空気が読めない奴は死ぬ。そういうことだ。

二つ目は、如何に飯のタネを稼ぐか。これに大きな影響を与える。言ってしまうえば、スリと強請のネタだ。

欠陥、言うなれば隙を見つけられるか否かだ。隙さえあれば懷に手を忍ばせられるし、目をかいくぐり有利に立つ事も出来る。

そして、人間の後ろ暗い部分という意の欠陥、コレを握り巧く立ち振る舞えばやはり飯のタネを得られる。

情報で脅し、強請り、時には恩を売る。こうして俺は身の安全を守ってきた。これには前者の流れも影響してる。

そして五年目、十二歳。

自分で生き抜く術を得、立場も安全も金も食事も、全て手に入れた頃。

俺は、そいつと出会った。

「なーなー、アンタなにしとるん？」

——俺は、霞と出会った。

＊＊

「……なんだ、あんた。何処ぞのお嬢様か？」

振り返ると、くりっ、とした対の緑の猫目が俺を見つめていた。猫目の身に付けた服は、どれも小奇麗に整えられ、しみや解れも見当たらない。文字通りの高級品だ。

まじまじと見つめる俺の視線に疑問を感じたのか頸をちょこん、と傾げると、

降ろされた長い薄紫の髪が、風に合わせ柔らかくはためき、ふわり、と甘い香りがした。

上級階層の下品に飾り立てた香水の異臭でも、下層の汗と金と色欲にまみれた生物臭い悪臭でもない。

どこか安心させる不思議な香りが、俺の鼻腔をさらと撫でた。

「んー、せやね。お嬢よりかお嬢様やないかなあ？」

「っ、……なら悪い事は言わん。さっさと出てけ」

一瞬、その自称お姫様に見呆けてしまい、隙を見せてしまった俺は慌てて無表情を取り繕うと、極力素気なく聞こえるように呟いた。

しかし、その少女はその言葉を聞くと、不満げに頬をむう、と膨らませた。

「なんやー、アンタもそないなコトいうんか。」

ちえ、これじゃ老師の言うことと一緒やん……つまらんわー」

しかし、この頭の螺子が足りて無さそうなお姫様は一体何が楽し

くてこんなゴミ溜めに足を運んだのだろうか。

まあ理由何ぞ知らないし、知りたくも無い。どうせ物見遊山な気分で来てみたとかそんな程度だろう。

「つまらないものか。老師の言う事しっかり聞いておくんだな。じゃなきゃ後悔するぞ？」

「へへん、ウチこう見えても強いんやで！ 後悔させられるんならやってみい、ってもんや！」

眉を吊り上げ強気な表情を作ると、へむと鼻息荒く細腕に力こぶを作って見せた。ごめん、何も見えない。

「はあ……兎に角だ、お姫様だか何だか知らんがな。

少なくとも親の威光か何かを頼りにそんな強気なら、此処じゃ全く効かないと思っておいた方がいいぞ。

ここじゃあな、目に見える力こそが正義なんだぜ？」

だから、ここでの正義は時として金となり、時として腕力や刃物になり、ある時は自分が従わせた人間の数にもなる。

と、ある意味徹底的に実力主義社会なそこに、こんな如何にもな世間知らずのお嬢……お姫様が入り込めば、

瞬く間に死体に群がる蠅の如く金と女の匂いを嗅ぎつけた連中の食い物にされてしまうだろう。

身ぐるみ剥がれ、輪姦されて絞れるだけ絞られたら最後にやドブの肥やしになって終いだ。

と、俺が諭すように言うと、コイツは面白くなさそうにまた頬をむう、と膨らませた。

「ならなおさらウチの出番やし！ 言っとくけど、ウチ強いで？」

強いんやで！ アンタなんか二秒でケチヨンケチヨンにノしてまえるで？」

「……なに言ってるんだか。ほら、こちららお姫様のお遊びに付き合ってるほど暇じゃないんだよ。

さっさとお帰りなさりやがって、

その大層ご立派な御屋敷でお女中様お侍らせになられてお勉強でも何でも、おなさりやがれたらいかがでしょうか？」

いくら細身だからって、俺も曲りなりにこんな危険地帯で五年生き抜いてきた身だ。

到底こんな世間知らずのバカに負ける気はしない。

「っ、ムカつくわあっ！」

アンタ信じてへんなっ、ええわ、そこまで言うなら勝負や、勝負！」

「……馬鹿馬鹿しい。何が悲しくて俺がアンタと戦わなきゃいけないんだ。

それに貧しい俺は怪我でもしたら治療費でさえバカになんないんだよ」

もちろん嘘だけど。けがの治療費位なら幸いある。

この時代から見れば未来人としては、今の衛生観念に馴染むとか到底無理だから、衣食の後には薬を優先した程だし。

住処に戻れば一通りの薬剤位はそろってる。

つまり俺は、単純にめんどくさいだけである。

やれやれ、と頸を振ると、お嬢はさらに突っかかってきた。

「んじゃ治療費もウチが出す！やで勝負しよ」

「もし重傷を負ったらその間飯食えなくなるんだけど」

「じゃあ飯代もウチが出すもん！やで勝負し」

……コイツ、やっぱりバカだぞ。

勝負に頭イキ過ぎて自分で何口走ってるか分かって無いんじゃないかねのか？

なんつーか、やっぱりバカだな。大事なことなので二度言いました。

「もしそれが治らなかったら俺働き口無くすんだけど」

「じゃあウチが雇ったる！やで勝負」

「もしコレで俺の得物が壊れたらこれから身を守れなくなるんだけど」

「ならウチが守ったる！やで勝」

俺が敢て最後まで台詞を言わせないようにしていると、なおさらムキになったのか。

半分涙目で、今にもうがー！、とでも言いだそうな形相になってきた。

……なんだこれ、ちょっと楽しいぞ。

「これで憲兵とかに目つけられたら俺暮らしてけなくなるんだけど」

「ならウチが融通させるさかい！やで」

「もしこれで右手が駄目になったら俺性欲処理できなんだけど」

「ならウチが抜いたる！や」おいこらちょっと待て落ち着け冷静になるだ」

いきなり何口走ってんだこのバカ。いや寧ろ俺何言ってるんだバカなの？死ぬの？

どうせ良いトコ生まれだからって舐めて掛った所為か？ 自業自

得なのか？

この時代だからなのか？ 近親相姦バッチコイな時代な所為なのか？

15歳、二児の母です（はあと）とかデフォな世界な所為なのか？
てか良いトコの娘さんが抜くとか言っているのか？

……てかなんでこんな俺慌ててんだ。

と、猫目は俺が突然止めた所為できよとん、と俺を見つめていた。

何故か尻がむずむずする変に居心地の悪い感覚を覚え、こほん、と一つ咳払いすると俺は無理やり言葉を続けた。

「あー、えっと……あの、だな。お前、意味分かって言ってるの？」

「何が？ ああ、抜くってこと？ 当たり前やーん、こう、シゴいて、ウッ！ てさせりゃええんやろ？」

無駄にリアルに手をわきわきさせ、卑猥な動作を俺に向けてきた。

……駄目だこのバカ早くなんとかしなないと。

心無しか、頭痛がしてきた。貞操観念、って知ってるか聞いてみようかしら。

『なにそれ喰えるん？』とか余裕で言いそうだなおい。

本当に世間知らずの男知らずで大馬鹿ものなのか。

それとも本当に誰かれ構わず文字通りくみ伏せ、言葉を借りるなら“けちよけちよん”にしてみえるのか。

余りにも無駄な自信あふれる様に、思考が三回転半空中斜め60

度ひねりして

このバカ実は皇帝の一族なんじゃないかとか、余りにも突拍子の無い可能性さえあるように思えてくる。

「つて、んなコトはどうでもええねん！ やでウチと勝負しようや！」

やっと台詞最後まで言えたお陰だろうか。
満足げにぐっ、とガッツポーズして涙流し始めた。

我が生涯に一片の悔い無し！ って感じた。コレなんて世紀末覇者。

いや、目的すり替わってるだろ、なんて突っ込むような藪蛇な真似はしない。

コレで満足したなら、俺もよく分からん決闘せずに済んで万々歳、皆幸せハッピーエンドだ。

「やっと言えた……っ！」

「あー、よかったね。それじゃあ、さよなら」

「ん、ほななー！」

そして普通に歩いてくると歩いて去って行き……。

………

……

…

「いやツツコめよ！」

「どわあっ！？ な、なんやいきなり！」

「そこは“まだ終わってないやんけ！”とかってノリ突っ込みするトコだろ！」

なんで美味しい振りをわざわざ見逃し三振なんだよ！」

「……何言いたいねん、アンタは？」

呆れられてしまった。なんだこの敗北感。
てか本当に俺何言いたいんだ……？

「む、何と言われると本当に困るな……。俺何したかったんだ？」

「さあ？ ウチに聞かれても分からへんよ？」

「だよなあ……」

「それじゃ、ウチ、見学で忙しいさかい」

「ん、あ、ああ。じゃあな」

どうやら本当にさっきの下りを忘れてるらしい。

……なんだろう、このすごいカロリーとか時間とか無駄にした
感じ。

そのまま猫目はまた普通にてくと去って行き……。

「つて、コレちゃうやろ！ 勝負忘れるなや！」

「いやお前だけには言われたくねェよ！！」

すでに満身創痍です。俺、もうゴールしてもいいよね……？
いろんな意味で。

＊＊

「へえ、で、アンタはさっさと逃げてきた、と」

「そうなんやさあ……、ほんと嫌んなるで。」

苞老師は頭がちがちやし、登盃はすけべえな目でウチ見るし、
劃由は金のことしか頭にあらへんし！

アンタも毎回勉強の度にあの視線受けてみいや！ ホンマ殴り
とうなるで！」

あれから紆余曲折あって、俺はオープンテラスのカフェで猫目か
ら相談を受けていた。

その紆余曲折に何があったか、と問われれば深い訳が……

当然ある訳もなく。

単純に俺が面白かったから暇つぶしの矛先がスラムから俺に向か
っただけだった。

お陰で俺はボロの着物でオシャレなオープンカフェで小奇麗な身
なりをした美少女とお茶する

という高度な羞恥プレイを展開する羽目になった。

通行人の目なんざ気にする程細い神経をしてる訳じゃあないが、
店員が明らかに食い逃げすんじゃないかねえかと身構えてるのにはちよっ
と傷つく。

俺のハートはガラス製なんだよ。厚さ60mmの戦闘機仕様の。

あとこのどっかでみた事あるような緑と白のパンダロゴの甘味処
の事は気にしない事にした。

なんだよオープンカフェって、東洋じゃねえのかよ。

パンダ普通に居るのかよ。19世紀までUMAだったんじゃないかねえ

のかよ。

このロゴ配色とデザインってどう見てもスターでバックなあのブランド意識してるじゃねえか。

あとは……。

……うん、まだまだあるけどもうやめよう。不毛だ。終わらん。まるでエンドレスな八月だ。京アニ仕事しろ。

まあ、このいつか分からん時代の無茶苦茶っぷりに突っ込んでいたら身が持たない、

って事は 眼鏡が普通に普及して何故かガラス窓がない事とか、ブラジャーとショーツが一般衣料店で売ってるとか辺り学習済みだし。

ちゅうごくよんせんねんのしんぴすごい、って言えば許されるとでも思ってたのかねえ……？

閑話休題。

猫目の愚痴は終わる気配すらない。

女って三人寄れば姦しい、なんて言うけど一人でもエンジン掛かれば止まんねえよな。

「ふうん、お役人の娘も大変なんだな」

適当に相槌を打ちながら、かき氷についてくるストローっぽいので杏仁豆腐をズルズル吸う。

……なんで甘味は未来レベルで発展してんだらうね。砂糖って基本高級品じゃ無かったっけ？

「せやてし。はあ……ほっと嫌んなるわ」

「ま、そこはお前がそこに生まれたからだ。諦めろ」

はあ、とため息を吐き机に突っ伏すお嬢。

白机の上に髪がふさ、と広がった。

そんな猫目を後目に俺は杏仁豆腐と格闘中。……ん、最後残ったカタマリが取れん。

直接飲め？ そんな無粋なコト出来ますか。するなら最初っからストロー使わないって。

ちよんちよこと突くと、柔らかいそれは簡単に崩れちゃった。掬うの諦めて吸うか。

俺が構わなくなったせいか、はあ、とまた一つ溜息を吐くと、いいいじ杏仁豆腐を弄りながら顔を路地に向けた。

何気なく視線の先を追うと、俺みたいにぼろっちい身なりをした8歳くらいのがきが一人。

人込みの中をちよちよこ進んでは、しゃがみ拾う、って動作を繰り返していた。

アイツ、こんな場所でお仕事とか無茶してんなあ……。

俺が視線を元に戻すと、猫目は3度目の溜息と一緒に呟いた。

「はあ……ウチも城下のあの子供とか、アンタみたい毎日気楽に暮らしたいわ……マジで」

その声が耳に届いた瞬間。
頭に血が上る、とはいい得て妙。文字通りのコトなんだな、と俺は場違いな感想を思った。

ガタンッ！

俺が立ちあがると木椅子が勢い良く倒れ、乾いた音が辺りに響く。

辺りの視線が俺に集まった。
店員など怪訝そうに眉をしかめ警戒してる。

「……どしたん？」

猫目もおんなじ表情だった。
それが無性に苛立つ。

押さえろ。落ち着け。深呼吸だ。

「生きる事を……、バカに、するな……ッ」
「……はぁ？」

反応すら確かめずに、俺は小銭を机に叩きつけてズカズカと歩きだした。

ぽかん、としているあの猫目の横を通り過ぎる瞬間。
アイツだけに聞こえるよう、俺は呟いた。

「……次、貧民街でお前を見かけたら殺す」

＊＊

／猫目

『……次、貧民街でお前を見かけたら殺す』

冷たい声やった。

底冷えしとって、まるで、歴戦の猛老将とか、冷血な参謀とか……

兎に角そういう、人を、本当に殺すヒトの声やった。

怒りとか、殺気とか、そういうんのをしっかり操つとる訳でもないのに。

手合わせすれば絶対ウチが勝てるやろう力量しかないのもわかったのに。

殺される、て思った。

いくら切り伏せても起き上がってきて、頸だけになっても喰らい付いてきて、喉元を食い千切られる。

そんな気がした。

絶対死んでまう、思うて、気付いたらアイツ居らんようになって。

へたん、とウチは力無く椅子に座りこんでまった。

初陣るとき、いっぺんだけウチんトコに矢が飛んできた。

もちろん避けられなくて、気付いた時にはもう遅くて、絶対死んでまう思うて足が止まって。

それは、矢は幸いにもウチの羽織だけを貫いた。

ウチには当らんかったけど、そんなときは本気で一瞬死んだ思うて、無事って分かって、そんで。

足から力抜けて立てんようになってまった。へにゃ、てなって落馬までしかけてもうた。

遅れて汗が噴き出して、喉がからからに乾いてまって、膝ががくがく笑った。

今のウチはあんときのウチと一緒に。

死ぬ、思うて。でも生きとって、安心してまって、恐怖と一緒に噴き出してまっとる状態。

人目がなかったら、ここが甘味処やなかったらウチは泣いっちゃかもしれない。

はあ……武人の端くれがこんなとか、情けな……。

なんか妙に自己嫌悪に襲われる。やっぱ情けない自分はみつともないかな？

自分どっちか言えば誇りとかに括らん方やと思っと思ったんやけど、

違ったんやろか？

……ん、でも、そーいう嫌な感じや無い気もする。
なんやろなあ、このもやもや。

んー、自分がいやや、っちゅうより、あーしとけばよかったわ、
って感じ。

……やっぱり、アイツなんかな？

でも、なんでアイツ怒ったんやろ。

直前まで普通に会話しとった訳やし、特に侮辱したワケでも無い
んやし。

無意識で気に障ってもうたんかなあ……。やっぱ無理やり過ぎた
んやろかなあ……。

んーん、それはちやう筈。

一刻も会話しとらへんけど、そーいう気いは絶対使えん人やと思
うし。

てかホントに嫌やったらアイツ着いてこんやろし。

……はあ。

ホント、ウチなにしてもうたんかなあ。

謝りたいし、訂正もしたい。

でも、見かけたら殺す言われてまったしなあ……。

はあ……。

……なんや考え出したらもつと鬱んってきた。

はあ……止めや止め！

ウチの取り柄はめげないことと元気なことや！
しんみりするの似合わんのや！

……はあ。

でも、なんでウチ嫌われてもうたんやろか？
アイツ……あ、名前もきいとらんかったなあ……。

はあ……。

友達、出来たん思うたんやけどなあ……。

ウチの眩きは、誰にも聞こえんとそよ風にかき消されてもうた。
温かい春の風は、冷たい木枯らしやった。

＊＊

／一刀

怒りに任せ飛び出したは良いが、俺の胸の内ではもう後悔が渦巻

いていた。

……まあ、それ自体は怒りにかられる度に、自分の浅はかさに呆れると共に感じるのだけど。

なんだか、今回はさらにもやもや三割増のサービスデイだ。

相も変わらず妙に血気盛んな自分への怒り二割、あの猫目の言への苛立ち三割。

後の半分は正直良く分からん。とりあえず自分をブン殴りたい気分。

因みに既に一回殴ってみた。すっきりするかと思っただけど頬が痛くて益々イライラしただけだった。

「……ああもうっ！ イライラするっ！」

何処ぞの南ちゃん芸人よろしくだ。

腋汗はそんなかないけどね。何せまだ身体としては一二歳だ。

精神は十一七だから二九歳。男は精神年齢が一五歳とも言うから二四歳か？

まあ、そんなことはどうでもいいんだ。

今一番の問題はこの良く分からん感情を制御できん自分だ。

一体俺は何にこんなイライラついてんだ、と自問自答するけどやっぱり答えは出ない。

頬も益々痛んできて、ずきずきとした刺激が余計思考を鈍らせてる気がする。

其れにまたイライラして、するとさらに頬やらなんやらが妨害を加速させる。

これぞまさしく悪循環。でも思考は止めない。

………うむむ。

………むむむ。

…

「…うがあっ！！

止めだ止めっ！ 埒あかなさすぎるっ！！」

5分ほど考えたけど、やっぱり分からなかった。

もやもやを声に出して発散すると、寝てた猫がビクンっ、と大きく身を揺らし逃げ出して行った。もやもやは相変わらずだ。

それを後目にドタンバタンと地団駄を踏んでもみた。年相応っぽいコトをしたのって凄い久しぶりな気がする。でもやっぱり相変わらずだ。

どうせ裏通りの廃墟だ、人の視線なんぞ気にする必要も無いし。精々さつきみたいに猫がいる位だ。

なのでさらにモノに当たったり声に出したり、所謂やりたい放題やってみる。

でも、相変わらずだ。

「………ぜえ、ぜえ。

畜生、なんだってんだぶふっ！？」

スコーン！ って良い音がした。同時に俺の後頭部が前に吹っ飛んだ。ついでに鈍い痛みもやってきた。

何事！？ と涙目で後頭部をさすりながらきよろきよろ見回せば、地面に落ちてゐる大根が一つ。

白いアイツは俺の足元で無言の存在感を放っていた。

『さつきからうるせえのよ！！』

とりあえず大根を手に取り、出所を探そうとすると、次に飛んできたのはオッサンの罵声。

語尾が何かおかしい気がしたけど、うん、聞こえない。

出所から見ると、どうやらこの廃墟にしか見えない建物に住んでる奴がいるらしい。

とりあえずイライラはさらに4割増しになった。畜生、すげえ頭痛い。

「黙れクソジジイ！ こちとらイライラしてんだぐふっ！？」

『誰が見るも無残な立ち枯れクソ爺ですってえ！？』

声の出所らしい窓(?)に怒鳴ると、また何か飛んできた。

鳩尾にクリーンヒットしたそれはまた大根だった。

ただ、二股で何処か卑猥な感じだけだ。

……てか、なんでさつきから大根投げてんだよ。食い物粗末にする余裕あんのかよ。

わけがわからないよ。うん、使いどころばっちりだ。

あと絶対突っ込まないぞ。台詞、俺にはキコエナイ。

「……うごお、大根クソ痛え……」

アホなコト考えられる割にダメージはでなかった。

よたよたと起き上がると、廃墟の隙間からおっさんが出て来るのが窺えた。

どうやら大根を回収しに来たみたいだ。やっぱり貴重な食料だったんじゃない。

「……」

『……』

視線と視線が交錯し、オッサンから無言の意志（大根返せ）が伝わってくる。

一度ちらと手に持った大根を窺い、おっさんに視線を戻す。

オッサンは笑顔で親指立ててサムズアップしてた。妙にしなを作ってる。キモい。

大根を両手に抱える少年、対峙するのはイイ笑顔のオッサン。

目と目が合う瞬間。なんて陳腐なB級恋愛映画のキャッチコピーみたいな言葉が一瞬俺の脳に浮かんた。

思わず背筋が冷えケツの穴を押さえ守りたくなった。俺はノンケだ。決してイイオトコじゃあない。

俺はノンケなんだ。大事なことなので以下略。

シュールな光景に一瞬の沈黙。

つむじ風がひゅうと吹いた拍子に、俺は、オッサンに背を向けないよう大根を両手に駆けだしていた。

なんか後ろを見せたらアッーなコトが起こりそうな気がしたからだ。

夕飯は煮物だな。うん。現実？　なにそれおいしいの？

＊＊

お尻の処女の危機を感じながら大根両手に疾走すること10分。
オッサンを無事撒いて俺は帰宅した。幸いにもアナルは無事だ。

「ただいま、っと」

まあ、誰もいないんだけどね。

一人暮らしって気軽だけど、帰宅の時とか寂しいんだよねえ。

というかあのおっさん勝手にゲイにしてたけど、本当のところどうだったんだろうか。

台詞？ 聞こえない（と書いて聞きたくない、と読む） んだよ言わせんな恥ずかしい。

……うん、止めよう。なんか気分悪くなってきた。さっきからケツやらアナルやら考え過ぎた。

この物語に登場する人物は皆18歳以上です、ってか？

残念だったねえ！

こちらKEN☆ZENな全年齢版なのさ。……うん、寂しくなってくるから一人遊びとか止めよう。

……つい思いつく言葉が一人遊びとか、俺溜ってんのか？

「……って、そーいやある意味溜ったままじゃねえか」

あの良く分からんもやもやが、だ。決してリビドーが云々じゃない。俺はノンケだ。

それにしても畜生、思い出したらまた腹立ってきた。
止め止め。先ずは腹ごしらえ。話はそれから。

大根を持ったまま一人ごちる俺。喉に小魚の骨が引っ掛かつてる
時みたいな感じだよ。

とれそうでとれない。取れない内は気になって仕方がなくてソレ
しか考えられなくなる。

柄じゃないよ、マジで。そういうしんみりはシリアスなキャラク
ターにバックドロップで丸投げだ。

……はあ。

＊＊

さて、気分を取り直して、と。

んじゃあのパクツた大根で煮物でも作るかね。窃盗？ 弱肉強食
と呼びなさい。

かずびーの料理教室、はっじまるよー！

……うん、ごめんなさい。なんだ今のテンション。怖いよ俺。
さて、気を取り直して。

ガサガサと玄関口に置いた木箱を漁る。ゴボウやニンジン、玉ね
ぎとか根菜系のモノは大抵此处にそろえてる。保存利くし、慣れた
味だし。

ジャガイモやらタロイモやらも季節に依っちゃああるけど、古代

中国、つちゅう世界観は木端微塵だよね。もう慣れたけど。

絹ごし豆腐とかなんであるんだよ起源は室町辺りの日本だよ……と突っ込んでも理解されないし。

で、俺がとり出したのはニンジン。

今日のレシピは大根の煮物と大根皮とニンジンのきんぴらに主食の饅頭だ。マントウ

まずは煮物から。

大根は、5 c m厚さの輪切りにし、皮を厚めにむく（皮はきんぴらなどにするので保守）。

ついでに大根の葉は根元2センチくらいまでの根ごとざっくり切り落として水に漬けておく。

すると植物の生命力の凄まじさをいかになく発揮しまた成長してくれる、ツちゅう訳だ。大根葉って旨いんだぞ。

んで、角の部分をもいて（面取り）、片面に深さ2 c mほどの切り目を十文字に入れる。

面取りすると、煮くずれしにくく、また見た目がきれいに仕上がるから俺は好んでやってる。

十文字に入れるのは、火の通りをよくするし、また食べやすくなるからだ。

んで、次は大根を鍋に入れ、かぶるくらいの米の研ぎ汁を注いで弱めの中火にかけ、竹ぐしがスーッと通るくらいにゆでる。

焦って調味料を（といっても俺にゃ塩くらいしかないのだけど）入れると火が通りにくいので、

下ゆでの段階で柔らかくしておくとか俺の好きな触感になる。

鍋ごと井戸から汲んできた水でさらし、大根を取り出して鍋をきれいにする。

さっきの鍋に大根とかぶるくらいの水を入れて火にかけ、沸騰し始めたら火から下ろして、再び流水にさらす。

鍋に大根と煮汁の材料を入れ、（日本人なら鰹節で行きたい所だけど）内陸の庶民でも容易に手に入る鶏肋で薄味のだしをとり、水でぬらした木の落としぶたをする。

弱めの中火で20〜30分間コトコトと煮る。その横で饅頭も同じ火で蒸す。

んで、その間にニンジンと大根のきんぴらを作る。コレは本当に簡単。

大根の皮をよく洗って細く切って、ごま油でさっと炒め、お酒で味付け

（何故か容易に手に入る好みで砂糖ちよっぴり入れてもOK）
仕上げに一味を一振り振りかければ完成。所要時間10分。

んで、余った10分で皿や道具を片付け、日本のかまどっぽい調理場も片付けてしまう。

30分たったところに、一度火を止めて冷まし、味を含ませる。
最後に再度温めて、器に盛り、完成だ。

コレで一食五銖銭2枚くらい。
日本円にすると多分60〜100円位。ぶっちゃけ相場がぐちゃぐちゃだから分からん。

うん、結構、いや、かなり豪華でブルジョワちっくな夕食だ。

具体的にはいつもの俺の飯丸三日分くらい。

まあ、このいつまでもイライラしてる居所の悪い虫を鎮める為だ
と思えば……。

大根はタダだったんだし。うん。

旨いものを沢山喰えば人間幸せになれるもんだ。

先行投資さ、うん。多分。

……

……

：

結論から言おう。

飯食っても全く変わりませんでした。

いや、自画自賛ここに極まりだけど旨かったよ。うん、大根様々だったよ。

でも腹の虫は治まらず制御できないイライラは増すばかり。

そして、こう、表面からむむむ、って考えても、多分解らんのだと言う事に気付いた真夜中の丑の時（約午前一時）。

高価な蝋燭を無駄に消費して何やってんだ俺、と後悔する一方で、何となく答えが見えたような気もして俺は一先ず満足し寝る事にした。

……蝋、買い足さなきゃ。痛い出費やぜ。

そんな事を思ってる内に、意識はだんだん薄れていった。

……そういや、あいつの名前、なんだったんだろう。

＊＊

「——様、本当にこの様な下賤の身分の者が暮らす所に住むのですか？」

「……ん、もう決めたんや。1ヶ月、ウチ此処で暮らしてみるんや、って」

「しかし、せめて護衛の者だけでも……」

「しつこいわっ、ウチが要らん言うたら要らんのや！」

一刀に猫目（仮）と呼ばれた少女は憤っていた。

しつこいお世話係の少女性愛者やら、やたら護衛をつけたがる成金文官やら。

もうほっというて、って気分や。

父上から許可はもらっとるんやし（お役所仕事な父上の書類に紛れ込ませた）

貧民街に土地に家は買ったんやし（少女趣味の文官にちょっと“お願い”してみた）

あの男の子んコトも調べたし（細作を勝手に動かした、50人くらい）

「大体あんたら束になってもウチに勝てんのに、どないして守るねん」

「っ、それは、暗殺や毒殺に……」

「ウチの細作で気付ける程度ならウチが気付くわ。ほれ帰りや」「し、しかしっ我々にもし」

抵抗するオッサンを無理やり放り出して、鼻っ先でぴしゃり、とウチは戸を閉めてもうた。

なんや外でワーワー言うと思ったけど、二、三刻したら諦めて帰っ

てまった。

でも、天井裏に一人居るっぽいし、外にも二人？おるっぽい。
どーせ邪にしかウチのことなんか構わへんのやし、適当に澄ませ
てくれればええのに……。

とりあえず、や。

見かけるも何もウチが住み着いてまったんやし、これで邪険には
出来ん筈。

名付けて『私、子供が出来たの。貴方の子よ、って既成事実作っ
て外堀から攻めたる』作戦や！

これで、アイツなんで怒ったか、分かるとええなあ……。

＊＊

／一刀

どこかで鶏が鳴いた。

重いまぶたを擦り開くと、まだ辺りは宵闇に包まれている。

AM4時。匠の朝は早い…。なんてことはなくただ単純に人より
早く起きるだけだ。

何故かって、そりゃ勿論生きるためだ。

早朝、それは俺にとっての仕事の時間。生きる糧を得る貴重な時間。

そう、それを人は

——アルバイト、という。

……あ、突っ込みは受け付けないぞ。

＊＊

「っはよーっざいまあーす」

「あらおはよう。今日も早いのね。はい、これが今日の分」

何処にでもいるような少年になると、俺はごく自然に扉を開く。厨房。まさしくソレな内装。むわっとする蒸気に、蒸された大豆の匂いが俺の鼻腔を擦る。

明るい笑顔で迎えてくれた中年大柄の女主人の手に持つ籠の中で、主賓のそいつは白くぷるんと光った。

そう、此処は豆腐屋。何故か中国にある日本の豆腐屋。

絹ごし木綿ごしバッチコイな豆腐屋。

マーボー丼作るのに最高の豆腐屋。

マーボー丼にするとマジ旨い豆腐屋。

大事なことなので二度言いました。

それが俺のバイト先。

「ん、はいッス。んじゃ、朝日が昇るまでに済ませますッスね」

如何にもな12歳のマセたガキになる俺に、主人さんは人の良さそうな笑顔で竹かごを渡してきた。

「それじゃあ、頼んだわよ。あ、李さんトコは今日是要らないから。」

あと新規で張さんから注文入ったわ。だから全部の数は一緒だけれど間違えないでね」

「はいッス。張さんって、あの杏さんちの横に出来た新しいのッスか？」

「そうよ。あそこの娘ったら面白い人でねえ」

「へえ、そうなんッスか。んじゃ、行ってきますッス」

「はい、気をつけてね」

そうそう、俺のバイトは出来たて豆腐の宅配サービスだ。

ひよんなことからあの主人さんに紹介されてお仕事もらって、俺が自宅宅配してみたら、と提案したことでもいまに至る訳なんだが。

それは余り関係なく面白くも無いので割愛させてもらう。

何はともあれ、お給金と美味しい朝ごはんの為、

俺は今日も籠を担いで朝の街を歩くのだった。

＊＊

『あらあら、今日もありがとうねえ。はい、コレ。小母さんからのお駄賃』

「わあ！良いんですか！　ありがとうございます！」

と、貰ったのは飴玉。砂糖味でマジでタダの飴だ。

そこは小銭とかだろ、なんて言う事も無い。俺は分別のある子供なのだ。

もちろん年相応っぽく猫かぶるのも忘れない。

『喜んでもらえると小母さんも嬉しいわ』

「はい！　いつもご贔屓にして頂きありがとうございます！」

いや、喜んでないんだけどね。流石に24歳が飴玉一つで喜んでたら気味悪いっしょ。

まあ、そんな事は言わない。俺は分別のある以下略。

『んふ、本当に、まだ子供なのにしっかりしてるわねえ。

ウチの子にも爪の垢煎じて飲ませてくれないかしら』

「いえいえ、そんなことはありませんよ。それでは僕はこれで」

それじゃあ、明日もよろしくね、と小母さんの声を背に受けながら俺は籠を担いで元来た道を戻る。

うん、これで後は張さんに配っておしまいだね。

時間はまだまだ余裕だし、挨拶がてらどんな人か確かめないとなあ。うん。

飴玉をころころと口の中で転がして、俺は何となくご機嫌に隣の長屋へ向かった。

一分後、俺はこのバイトを選んだ事すら激しく後悔することになるのだが、その時は知る由も無かった。

＊＊

「おはようございます！ お豆腐の配達に来まし……た……？」
「ん、ああ。ご苦労さ……ん……」

俺は先ず目を疑った。次に頭を疑った。最後に天を呪った。
……いや、落ち着け、落ち着くんた。ありのままに今起こった事をポルナレフ状態するんだ。

あ、ありのままに今起こった事を話すぜ！

豆腐の配達に来たら、次見かけたら殺す相手が以下略。

うん、流石にテンプレすぎるね。うん。

さて、どうしたものか。うん。

よし、とりあえず問いただそう。話はそれからだ、うん。

さっきから俺うんうん言い過ぎだね、うん。

「さて、俺の記憶違いでなければお前は次俺に会ったら殺される筈なんだが。

選択肢をあげよう。

- 一、アナタチュウゴクゴワカリマースカー？
- 二、ゴメン、ウチ、殺されると感じてもう異常性癖者なんや
- 三、なんでウチあんどき怒られたから分からへん↓なら聞けばいい

いんじゃないね？↓天才 k t k r !

因みに一なら今すぐ帰れ。そんて言葉勉強してこいこの池沼が。二ならもれなく俺が犯した後に殺してやるこのビッチが。三な」

「三番や！ 大体いきなり殺す言われる理由が解らんもん！」

……やっぱりコイツは、マジもんの貴族とか豪族とかって奴か。

「そっか……」

「せや！ やで来たんや。あのまま分かりあえんとか寂し過ぎるもん」

「じゃあ一生分かりあえないね、うん」

「なっ、なんでや！ まだ話してもおらんのに」

「帰れ。お前が遊び半分で来ていいところじゃないんだよ」

自分でも自覚できるあんまりな言われ様に、猫目は涙目になった。

困惑と悲しみに襲われて今にも声を上げて泣き出しそうなツラになってやがる。

でもまだ殺してない俺超良心的じゃん。いや、約束を破ってるから寧ろ不義者か？

……イライラしてきた。折角気分よく真面目に労働に励んでいたのに。最低だよ、メーター下限突破だよ。

大体なんにも分からない分かるうとしないこんな奴になんで俺が絡まれないいけないんだよ。

俺だって孤児なんだ。生きるコトがマゾゲなんだよ。それなのにコイツは……。

……ん、もしかして、俺はコイツに――。

「あ、遊びやないもん！　ウチも此処で暮らしてアンタの言うたことの意味を分かるんや！」

「それが遊びだって言ってるんだよ！！」

思わず声を荒げてしまった。

くそっ、落ち着け俺。

「遊びやないっ！！」

ウチかてなんで嫌われたか知りたいし、謝罪やてしたいんや！
やで城も出たんや！」

城を出た。コイツ、ギャグで言ってるのか？

……ギャグなら是非一緒にM-1狙おうって誘いたくなるレベル、
抱腹絶倒間違いなしだが。

おあいにく様、彼女はギャグのつもりなど毛頭も無かったようだ。

「ふざけんな！！　初めっから家と金と飯と服と何もかもそろってて分かる訳がねえんだよ！」

手前は餓死しかけた事があるのかよ！　泥水を啜って蛆に生ごみに残飯に喰らったことはあんなのかよ！

昨日の仲間の死体を漁って、弱り倒れた老人を殺し奪った事があるのかよっ！！

ねえんだろ？　朝昼夕保障されて綺麗なおべべに香油たっぷり使って身支度整えてんだろう。

勝手に出る飯、常に強者から保護される安全、お湯をたっぷり張った風呂。どれもそろってんだろ。

本読み放題、武鍛え放題、お金使いたい放題。おお凄いい凄いい」

俺の言葉を聞く程に、猫目の表情が暗くなる。心当たりばつちりなんだろう？

そして薄っぺらい同情とか後悔とかに苛まれてんだろ？ ふざけんじゃねえ。

「さて、そんな貴方に質問です。そんなキミは一日三十銭で飯を食えますか？ いや、先ず一日三十銭稼げますか？」

「なっ、馬鹿にすんな！ ウチかて三十銭くらい稼げるわ！」

ムキになったのか、顔を真っ赤にしてあげる猫目。

……うわ、どう見てもなんも考えてねえな。

「じゃあ、どうやって金稼ぐの？」

「え、それは……えっと……？」

ほら見やがれ、明らかに目を反らしてんじゃねえか。

「ああ、女だったな。じゃあ股でも開いて三十銭握ってこいや。そしたらお金持ち様のご高説、とやら話聞いてやるよ」

「……は？ ……って、な、なな何を言うとするんや！ そないなコト出来る訳ないやんか！」

「……はあ、やはり偉そうな能書き垂れる割にや我が身大事。貞操観念処女信仰ってか？」

「当たり前や！ 神聖な行為なんやぞ！」

「馬鹿じゃね、お前。てか馬鹿だな、うん、馬鹿。お前馬鹿。やーい、ばーか！ ばーか！」

「ッ、ホンマ腹立つ！」

「そっか、じゃ仲直りとか無理だね残念でした残機も無くなったので良い馬鹿の子はお家に帰りましょう」

「っ、イーだ！絶対に帰らへんからな！」

あ、選択肢ミスったよ。なんか余計むきになっちゃったよ。
クイックロード使えないかなあ？ あ、やっぱ駄目？ ……ツチ。

「……まいつか。んな事より、貞操観念の強いアナタに質問です。
この街のあるところに、全裸で倒れてる幼女が居ました。一体
どうしたのでしょうか？」

正解者にはもれなく花丸をあげちゃいます」

と、俺は来る時に見かけた道にごろりと倒れている少女を指差した。

俺や猫目なんかよりも見るからに年下。所謂幼女、という奴が全裸で道端に倒れていた。

「そんなん決まっとる、なら助けんといかんやん！」

「はいブツブー。数ある答えの中でも最悪ですね。減点八十点。
お兄さん悲しいです。」

正解は、売春のつもりで飯が食える最低元の金額三十銭を稼ごうと思ったら、

相手を見誤って身ぐるみ剥がれ好き放題犯され弄られ文字通り精根尽き果てて今にも死にそうにいる、でした。

正解者には拍手、よく出来ました。ありがとう俺、気にするなよ俺」

わざとチャラけて答える。

すると、猫目は信じられないモノとか粗大ゴミとかを見るような眼で俺を見つめてきた。

「なっ、なんでそんな酷い事に……なんでアンタは見捨てられる

んや！ 死にかけとるんやで！？」

「その口でその台詞を図々しくのたまいやがるんじゃねえ。

そんな事より、俺の意味すること分かった？ ねえ分かって

くれた？ アンタは三十銭に命かけられるの？

飯を食べる為に毎日他の男に犯されること出来るの？ ねえ、

アンタが軽々しく言った三十銭って、本当にそんな軽いもんなの？」

「っ……」

俺はが一頻り言い終わると、猫目は俯き、悔しそうに唇噛み締め
ていた。

やっと理解したのか？ ……しかし俺はなんでこんなにコイツを
気に掛けてんのかね？

説教なんて柄じゃないんだけどなあ。

「で、でもっ！ コレと助けない事とは関係ないやん！！ 見え
る範囲くらい助けようと思わんの！？」

「ふうん。まだそんな事言っちゃえるんだ。じゃあ聞くけどさ、
なんであの子あんな目に会ってるか分かる？」

たった三十銭がないからだよ？ ねえ、大通りで串焼き一本し
か買えないお金がないからなんだよ？

その原因、って知ってる？ お姫様ならもちろん知ってるよね？
そうだよ税金だよ？ 集兵と税金だよ？

戦ばっかしてお米が国に回ってない事もしってる？ キミみた
いな若い將軍をばしばし増やして兵士もガンガン増やしてるからだ
よ？

知らないの？ ねえ、知らないの？」

「……だって、女が国政に関わったりできんし……」

「嘘だね。見なかった、んにゃ、見ようとしなかったんだろ？

お姫様のまんまで良かったんだろ？ 別にそんな気持ち普通だか
ら構いやしないけどさ。ねえ、自分の立場で胡坐描いて上だけ見て

たんだろ？」

「そんなこと、そんなこと……ない」

「嘘だね。キミが偉いのは仕方ないよ。だってそう生まれたんだもん。」

でもね、キミに僕達が生きるのを侮辱する権利は無いよね？
それともそんな権利得られるくらい何かしてくれたのかい？ねえ。
答えてよ。

さて、今のでキミの認識が解ったよね。言われたり興味もたなきゃ、孤児なんてそこらの布屑と一緒になんだろう？『やめ……』

ねえお金持ちさん。換えが利くし、つーか勝手に居るだけだし。
『や……止めっ』何も生産しない癖に一人前に揉め事と死体だけは作り出すし。

はははっ、マジでゴミだな俺ら。大爆笑じゃね？ まじ腹筋よじれちまうよ。『違……っ』

いっそ火計で街ごと燃やす位の案も出てたんじゃないの？ ねえ、そうなんだろう？ 視界に居ても見える範囲じゃないんだろ？

それってつまり存在すら要らないじゃん、もう生きてる意味無くね？ なのになんで見ざるを得無くなったらそんなこと言えちゃうのさ。

見てる俺と見ないお前、さて、キミン中の善悪感だと、どっちが悪モノなんだろうかね？

結局さ。興味無いから、お前 あの時のやせ細った死に掛けのガキ見て “ 気楽 ” って言えたんだろ？

「……ちがつっ！」

「違わない。自分の図々しさ、恥知らずで無礼極まりなくて儒教社会じゃ最高に“美しい”思想だろ？」

それに酔っちまえよ。どうせお前ら支配者はそんな生き物じゃ

ん。それが悪いなんて、もちろん言わないよ。三度も言ったから分かってると思うけどさ。

でも下にゃ下が要るんだろ？　ねえ、生まれてきた俺らが悪いんだろ？　徳がないから虐げられる俺らは最高に醜いんだろ？

そんな俺らは気楽なんだろ？　お気楽で呑気で幸せ者なんだろ？　それがお前の考えなんだろ？　だからわざわざ貧民街に出向いたんだろ？

もう、お腹いっぱい笑えたんだろ？　わざわざ現地で侮辱して穢して貶めて辱めたんだ。もう帰れよ、満足だろ？」

「違う！！」

「何が違うのさ。じゃあなんであれを見て気楽に見えるのさ？

興味無いからじゃん！　そこにいて虐げられた当たり前だからじゃん！

いまキミどうせ後悔して同情してるんだろ？

でもね、これ作ったの、お前ら支配者なんだぜ？」

「ち、違うっ！」

「何がさ。キミの正義感とか信念って、そういうことじゃん」

「違うもん……！　ウチは、ウチは……ただ謝罪したくて……！」

「だからさ、無理って言ってんじゃん。俺、キミの意見生理的に無理。」

仲直り、って一方通行じゃ無理なのよ、知ってる？

キミから矢印向いても、俺、キミに向ける気無いし。ほら条件達成不可能じゃん。ハイ終わり」

「そんなことっ……！」

「あるんだよ。世の理不尽、いっぱい学べただろ？　よくできましたねー、お勉強になるねー、為になるねー。でも理解はできやしない。残念。」

ほら、豆腐。俺の仕事終わり、帰る。俺商人、お前お客。関係終了。諦めてお城に帰ってお世話係に甘えてろ」

……うわ、俺すっげえ喋ってる。キモッ。
本当、なんだろう。めっちゃ調子狂う。あり得ん位平常運転出来ん。

俺の愛しの冷静ちゃん。帰っておいでいいでい……。

……エコーしてもだめか。

どうなってんだろうね、俺。こんなイラつくならさっさとヤツちやう筈なのにさ。

なんでわざわざ説教してんだろ。

ま、いいや。——の感情だけじゃ無かったっての気になるけど、これ以上コイツといられっか。

俺が変になりそうだし。

くる、と背を向け、歩き出す俺。

明日はこの配送なけりゃいいなあ、とか思いながら俺は昇りかけた朝日を後目に走り——

「っ……、ウチ諦めんもん！」

出せなかった。つかつんのめって籠が盛大に……。

「諦めてください。そして籠ぶちまけやがりましたね死に晒してください」

「イーだ！ 絶対アンタと仲直りするもん！」

……俺、変なフラグ踏んだか？

多分最後の台詞かな。武人系に甘えろは禁句だったか？
クソ、クイックセーブが以下略。

「却下。拒否。無理。ありえない。確立すら存在しないまごうごと無き零」

「そんなことない！ 絶対！ アンタを理解する！」

「埒あかないね。面倒だから帰るよ。お嬢様に理解とかあり得ないよ」

「あっ！ 逃げるなや！ 絶対！ 絶対アンタを理解して訂正して……」

返事するのもめんどくさい。あーあー、聞こえないー聞っこえないー。

「初めての友達にしたるんやからなっ！」

「……は？」

そして、俺はこのバイトを選んだ事すら激しく後悔することになった。

＊＊

／猫目

ウチの朝は結構早かったつもりやった。先ず絶対に日が昇る前に起きとったし。てか起きてまうし。

朝の涼しい空気の中で偃月刀の素振りをするのはもう齒磨いたり、

身体洗うみたいな自然にする習慣と一緒に。

やらんと落ち着かんくなってまうし。

んで、きっちり千回、ブレない様に、基本通りに振る。

終わると次は、実戦を想像して演舞する。打ち込んで、叩き割って、横に薙いで、貫いて。

一挙一動で相手を確実に、殺す為の動作を繰り返す。

各百を振り、全部が丁度終わる頃に、朝日が顔を出し始める。

そしたら濡らした布で汗を拭いて、戦装束を片付けて、偃月刀の手入れをする。

終わると見計らったみたくピッタリに侍女さんが朝飯を持ってくる。

毎朝内容は決まっとして、肉包ろうぱおと、青菜と豚肉ちやおほつあいの炒合菜をしつかり食べる。

最近背も胸もなんや成長しだし、偃月刀振るにも筋肉が要るし、やでいっぱい食べる。

お腹いっぱいになったら、老師と一緒に文字と儒学の勉強。墨も竹簡もたっぷり使って反復練習。

二刻くらいやったら、太陽が真上に昇るからお昼ご飯を食べる。粥と何かの野菜の塩漬けを食べる。

午後から騎馬訓練があるので軽めに済ませとった。腹三分目くらいかなあ。

食事が終わると、常駐兵のおっちゃんねえちゃん達に交じって訓練。

模擬戦とか勝ちぬき戦とか、乗馬訓練とか。

日が傾くまで、思いつき馬走らせ、武器を奮う。

ちなみにここじゃウチは敵無しや。馬術しかり、武芸しかり。

夕暮れに城ん中に戻って、用意されたお湯と布で汗と汚れを落とす。

五日に一度だけ、お湯を張った浴槽で湯浴みができる。

その日はウチも皆も何となく機嫌よくなるし、皆さっぱりするから好きやった。

夕飯は大体日替わりやけど、肉包か菜包が主食で、それに汁物と粥、肉か野菜の炒物と果物が出てくる。

それをぺろりとウチは平らげると、寝支度を侍女はんと一緒に済ませて、蟬に火い灯して本を読む。

大体は軍記ものとか、歴史書とか。たまに宿題の兵法書とかも読んだ。

一刻くらいかけて一編読むと、明かりを消して、柔らかいかけ布に包まれて寝る。

これが、ウチの“あたりまえ”やった。

あの日、あの男ン子にボロクソ言われるまでは。

これが普通で、これが世の基準で、これ以上にすれば贅沢なんや、って思うて生きとった。

……全然違った。

ボロクソ言われてから、ウチはやっと下を見た。下が見えた。

三日。

アイツに言い放題されてからウチは形振りも見栄えも構わず聞いて尋ねて見て回りまくった。

そんで、やっとコレっぽっちもウチは普通じゃないんや、って気付いた。

アイツとかみたく貧民街の子どもは兎も角としてもや。

日に三食食べられること。湯で身を清められること。夜明かりを灯して竹簡が読める事。

全部、普通や無かった。

普通の民草の普通ですら、昼食は軍人か土木やる人だけの特権で温かいお湯で身支度するなんてとんだ薪の無駄遣いで。

夜に明かりを灯してまで本を読むことはとんでもない贅沢やった。

それが、“普通”の普通、常識で当たり前やった。

ウチの常識はみるみるうちにグシャグシャになってもうた。

＊＊

／一刀

「んじゃ、明日もよろしくなー」

「……」

さて、結局あのバカは貧民街に住むことになった訳だが……。

というか豆腐一週間届け続けてるんだが未だ帰る気配がない、どころか順応し始めとる。

主人さんもなんかめっちゃ気に入っとるし、何を思ってるのかは知らんが、貧民街の生活に着々と馴染んできてるし。

……あいつは本当に一体何を考えてんだ？

折角金のあるトコロに生まれたのに、わざわざソレを捨てて安穩とした生活からかけ離れた場所に来るとか。

マゾとか、非虐趣味とかか？ それとも修行して喜んじやう系の人とかか？

俺だったらあり得ないね。大体俺脆弱な未来人だし。

もしお金のある場所に生まれてたら、そこから蹴落とされない為の努力はするだろうけどさ。

アイツに言った“つまらない同情”くらいはしてもそれで終わらさうしさ。

結局俺が怒ったのも、今までの苦勞が一単語で片付けられたんが気に入らないだけだったし。

冷静に思い返したらそんなもんだ。仲間意識とか、同族意識なんぞ無いし、絆（笑）とか、友情（苦笑）とかも無いし。

庶民の味方とか気どれる程余裕は無いんですよ一刀さんには。

でも俺、なんであんな些細なことでムキになってたんだっけ。

いつもならもっと、こう、なんつーか。

打算的？ な感じで上手く利用しよう、とか。そういうキャラだった筈なんだけどなあ。それが生きる術だし。

アイツ猪突猛進の申し子みたいなキャラだから、お涙頂戴な演技の一つや二つかませば、それこそお財布になってくれたりしただろうし。

なんでかねえ。マジで。調子狂っちゃうよ。

……それにしても、あんな春頭で生きてけるのかしら。

いや、心配してないよ？ 別に心配はしてないんだけどね？

なんつーか、あんな大層なお説教かましといて、それで死なれたら後味悪いと言うか。

というかあんな軽い会話した相手自体アイツが初めてでそんな相手が知ってる所で死ぬっちゅうのも、

気分的にも精神衛生的にもよろしく無いし。

それに俺は何だかんだいってもアイツに会う度イライラしてる訳だし。

……ねえ？

あれ……俺、一体何に言い訳してんだ。てかなんで言い訳してんだ？

脳内説明口調とか、天から声がするのか、天から。

それとも、アレか。右目の邪眼とか封印された右腕とか黄金の左足とかそういう年頃なのか？

ルシファーなのか？ ルシファーさんが堕天使で暗黒騎士さんチーッスなお年頃なのか！？

……まだ、一二歳なんだけどなあ。

ん、こほん。

それにしても春だね、頭が。

弱肉強食なこの時代で博愛精神とか持ってたのかね。じゃなきゃこんなところに住まんだろうし。

生まれる時代が違えばそれこそノーベル平和賞とか狙えるレベルだろうけど。

こんな時代じゃ喰いもんにされるだけだろうに。

幸いにも、表な方だけ見て暮らしてるみたいだから良いけどさ。裏なんて見ちゃったら……ねえ？

……って、俺はなんであんなのの心配してんだっ。

はあ、もう訳分からん。

俺はアイツが嫌いな筈だ。うん。嫌いだからあんとき気に食わなくて。

嫌いだから前にお説教した訳だ。

うん、アイツが嫌いだからだ。うん、そう、嫌い、嫌いなんだ……よな？

そう言えば、及川は俺に良く、ツンデレ乙！とか言ってたっけ。

……いやいやいやいや。天が認めても俺は認めん。

ツンデレじゃない、あの時初めて調子狂わされたから何となく気になるだけでだね、うん。

大体俺はアイツが嫌いで、俺自身突き放そうとしてるんだし。大体俺自身何故かイライラしてんだし。

うん、好意的ならそんなことしないし、うん。だからツンデレじゃない、うん！

完結だよ、はい論破。

よし俺大勝利、だから俺はツンデレとかじゃなく単純にあの時の違和感的なのが気になるだけであって……

（以下無限ループ）

——この非生産的の極みな一人議論、一人言い訳に気付き冷静になつてた頃には

朝日が完全に昇りきつて、主人さんに笑顔でドヤされる羽目になつた。

くそう、やっぱり俺アイツ嫌いだ。アイツなにもして無いけど。

＊＊

四季が半分廻って、秋が過ぎて、気付けば平野は緑から灰色に変わり、木枯らしが吹き始める季節になつとった。

気温もここ数日は骨まで凍てつかせる様な寒さで、毎朝井戸水を使うのが辛い。

半年も家を出とるのに、城の連中はなんも咎めなかった。

元々父上はウチが武官を目指し始めた辺りで興味無くしとるし、母上は顔も見えた事無いから除外。

城の連中も、またお嬢が変なこと始めたな。くらいにしかおもつとらんらしく、心配しとるんはウチで飯くつとった連中くらい。

……一郡の長の娘なのに、ウチって軽いなあ。

ま、その方がウチも気楽やさかい。気にせんけど。

流石に最初の頃だけは自力で出来なかったで、お金とご飯貰うと

ったけど、今は完全に自分で稼いで自分で喰えとる。

うすい塩味だけの粥にも慣れた。

身を切るように冷たい井戸水で身体を拭うことにも慣れた。

一日二食で労働に励み、自分の日銭で飯を食べる事も慣れた。

未だ慣れれんのは廁が全然廁ちゃうことくらいかなあ。

信じられんて、廁に敷居が無いとか。なにが悲しくて全部公開せにゃならんねん。

閑話休題。

思ったよりずっと時間かかったけど、

やっとこれでアイツがあんとき言っとった気持ち少し分かったと思う。

ウチは今まで見ようとせえへんかったモンを山ほど見た。

ありとあらゆる方法で、ウチに使えるだけの手段を使い尽くして。これでも全然少ないんやろけど、ウチのくしゃくしゃやった“常識”はもっと徹底的に粉々や。

人の死は悲しい事で、人の誕生は嬉しいこと。

ここは、違う。

人の死は嬉しい事。亡骸の持ち物も、骸も髪の毛すらもお金に変わるから。

人の誕生は喜べないこと。食いぶちは増えるのに、赤ん坊は何も

生み出さないから。

売れるまでの数年がもったいないし、お腹減ったから食べてしまおう。

そんな思考を見る事すらあった。

ゴミ捨て場に残された、ちいちゃい腕を見たときには、ウチは胃の中身を、胃液まで全部そこにぶちまけてもうた。

ここは、狂気に蝕まれとる。

奪われ、奪い、また奪われ、さらに上に根こそぎ奪われる。

それが当たり前で、それを誰も不思議に思わなくて、それが当然だと皆諦めとる。

そんな連鎖の末端、まだ十にもならんようなじゃりっ子は全部を盗ってかれる。

ずば抜けてずるがしこかったり、腕っ節が強くなかったりでもせえへんと十を超えられんのや。

そこを飄々と生き抜いて、普通に家持ったアイツは、一体どんな人生を送って来たんか、さっぱり想像が付かん。

儒学、っちゅうのは、人としてのあり方を説くモンな筈や。

それが、他人から奪う口実に変貌しとる。

自分が偉いんや、って思いこんで、自分を保って、弱いヒトは奪われるのも自分の不足や、って諦める。

それで、さらに下を探してまた奪う。

無茶苦茶矛盾しとって、意味不明なのに、それが常識や。
狂っとる。やでウチは初めそう思った。

今はそれがちゃう事に気付いた。

狂っとるんやないんや。狂わんといかんのや。

ウチは何時でも抜けられるから、正常で居れた。

此処から出られん連中は、狂って、自分に暗示を掛けんと耐えられへんのや。

やで……アイツがあんなして怒るのも、無理ない、って思った。
何もかも用意してもらって、ぬくぬくと日々を生きる人間に、

『気楽や』

なんて、流されたら激怒して当然や。

いま思い出せば、むしろあんどき、マジで殺されんかったのが不思議なくらい。

一年掛けて、やっとウチはそれを理解した。

これで、アイツに謝れる。アイツに訂正できる。

それに、 何度も恩を受けた。

なんもしらんウチは、何遍も厄介事に巻き込まれかけよったらしい。
い。

らしい、っちゅうのはウチは実際には巻き込まれとらんから。
……アイツの、お陰で。

やで、今度こそ、頭下げて、謝って、恩返して、そんで……

友達に、なれたらええな。

＊＊

／一刀

「……あ、毎度ご苦労さん。え、えっと……その……」
「……？」

いつも歯切れの良い張遼が、なんだか今日は変だ。

竹を真つ二つにしたみたいにサバサバした性格は、環境次第じゃお姉様とか慕われて。

勢い余ってついめくるめくゆるゆりな世界に行く感じ。つまり男勝りってことだ。

それが、何やらもじもじとして歯切れが悪い。

まるで女の子みたいだ、と、コイツは元から女な訳だが。

……半年隠してたけど、実はあたし付いてます。とか無いよな？

基本的に毎朝の顔合わせ（お豆腐配達）では無視余裕だけでもさ。半年も定住してお得意さんになられたら否が応でもその人の大体の人となりは把握できるもんだ。

それが今更男だった、なんぞカミングアウトされても困る訳で。

まあ、表面上の態度は全然変わってない訳だが。

相変わらず俺は訳も無くイライラしながらコイツに接してるんだし。

そんな状況でフラグ立つとかそれなんてパワポケ。

なんでフラグ立たせる為に映画館連続で往かなきゃならないんだと。

普通同じところ行くと好感度下がるから行かないのにそれはないだろ、と。

……まさか、気付かれてた訳じゃないよな？

いいや、尾行は蛇さんも真っ青なレベルで完璧だった筈。手回しも最低間に四人挟んで実行してたから気付き様がない筈。

まさか、張遼って名前だけで無双ばうわぁ（苦笑）とかが発揮されたんじゃないよね？

一三年生きてきたがそんな都合主義は一切なかった訳で。

というか張遼って男だろ。うん。張さんなんて名字は超メジャーだし、日本の田中さんとかと一緒にレベルだし。

張さんの遼ちゃんが居てもなんも不思議じゃないし、うん。

ただまあ、俺の存在がモブじゃないのでイベントが、っちゅう可能性もあるあ……ねーよ。

今までの経歴見てもとても主人公じゃないね。

うん。精々彼女をイケメンナデポ主人公に寝取られる可哀そうなサブキャラA。不動先輩エ……。

未来で転生者とかでたら良くて精神病院を進められるだろうし。それに俺は現にタダの一般人Aだし。今も、昔(?)も。

よくある神様に出会ってチートを、とか。最初から可愛い幼馴染

や最強の妹が、とか無くて転生？記憶の保持？した訳だし。

人生最初からヘルモードで歩いたら死に掛けましたとか余裕だったし。

むしろあのレベルの不幸で脆弱な現代人の俺が生き残れたんだから類稀な幸運かもしれんが。

章仁みたいに妹先輩幼馴染高飛車後輩と死角なしハーレム野郎ならまだあったかもけどさあ。

この世界でも俺はモブ男A的な扱いな可能性の方が高いし。

つまり何が言いたいかって言えばフラグとかねーよって事だ。

エロゲ脳乙？ 煩い、親友がリアルコレなんてエロゲ野郎だったんだから許してよ。

……そーいや、章仁とか及川とか、元気にしてるのかねえ。

※章仁とは、前作『春恋乙女』の主人公です。

＊＊

脳内話題は変わるが、最近知ったんだが今の国の名前は漢で靈帝とかいう奴が治めとるらしい。

未来と違って王って存在は民衆から見れば神様みたいなもん。だから、皇帝、つちゅうのは国を治めている偉い現人神的な感じ

らしい。つまり良く分からんってことだ。

そりゃそうだろうけどねえ。都の近くならいざ知らずだけどさ。

こんな北の果てに住んでれば皇帝なんて一生見ない訳だし。ただこの人が支配してますよー、ってだけで、殆ど影響ないし。

だから国号も名前も皆興味ない。貧民街とか特に。しってて敬ったところで腹が膨れる訳でも無し。

それ故に知るのが大分遅れた訳だけどさ。漢、って言ったら

先ずは項羽と劉邦、四〇〇年後に曹操、孫権、劉備。

世界史サボってた俺にゃこんくらいの知識しかない。

俺の生きるこの時代は、このどっちが近いんだろう？

とりあえず霊帝さんがいつごろのお方かは知らんが、項羽と劉邦にお会いすることは無いだろう。

太守さんの大きな変動とか無かったし。体制が変わってないなら去年まで四面楚歌してました、なんて事は無い筈。

ならあり得るのは後者の、所謂三国時代という奴だ。

あり得て欲しくないけど。マジであり得ないで欲しいんだけど。

授業でやった内容は西暦二〇〇年くらいにガシガシやってて、二八〇年くらいに晋が平定しきるまで。

はーい、先生！ 西暦使われてもボク今がいつか分かりません。

コレは大問題こまったねえ。どうしようかねえ。いや至ってマジで。

だってさ、三国時代って百万単位で人がぼこぼこ死ぬ時代だぜ？
もしもあと五、六年で黄色の布の連中が出てきたりしてみろよ、
俺徴兵√で死亡エンドだどう考えても。

一三年幸薄い生活してきた俺はいくら転生とかしててもどう考え
てもモブだろうし。

曹操とタメ張ったり、孫権と手を組んだり、男として夢見ない訳
じゃないけど、どう考えてもモブ男Aの俺にゃ無理。

うん、死にたくないもん。

霊帝さんがいつの方か知らんが、アレだ。うん。頑張って生きて
ね。俺の為に。

＊＊

閑話休題。

半年前。住み始めて一週間目、あの張遼が危なっかしいことし始
めたのは。

貧民街に定住するだけなら良かったんだよ。表は貧しくても良い
人居るし、街の体は保ってるから。

あのバカは何を思ったか裏に足を入れ出したんだ。

お嬢様が火遊びしたさに覗き見てるんなら別に構わないんだよ。
死ねばいいんだ、そんなバカは。

でも違った。来て二、三日の間してたみたいに、そこらじゅう片
っ端から見て尋ねて聞いて調べ上げたんだ。

裏は、人が人として住む場所じゃあない。

一言で言えば……なんだろうね、地獄、はちよつと違う。狂気の
増埒とかかね。

横行する殺人強姦、気持ち良くなれる白い粉。

まあ、白い粉売り買いしとる辺りはまだマシ。最悪なのは気の狂った連中共の溜り場。

快樂殺人犯と死姦趣味者がお隣同士でおすそ分けが人間だったり、赤ん坊を切り売りする為に人間を飼う女が居たり。

しかもそれらでも需要あると来たもんだ。

その所為である種の治外法権が適用されてまでいる。ここじゃ何が起きててもみ消されるところか煙すら立たない。

たいていは文字通り、骨の一片も残さず消えるからだ。

その先は宮中でもあり、闇市でもあり、懷や隠し金庫で、住人の胃袋の中でもある。

元未来人としては信じたくないが、最悪の場所では人の足が本／八十銭とかの値段で、ヘビや猫やら鼠やらバッタやらと並んで売られてる。

その横じゃ麻薬中毒者が妄言を喚き散らし、週に一度は突然暗殺されたらしい人間が頸を無くし倒れたりする様な場所。

まさに、狂ってるとしか言いようがない。

だが、それ故金が流れる。

最高純度の麻薬なら薬包紙一つ分で朱銭束の二本が飛ぶ。

そこには金の匂いを敏感にかぎつけたハイエナが群れでやってくる。

街の犯罪者共を支配し統率する犯罪シンジゲート、分かりやすく言えばチャイニーズマフィア、という奴だ。

まあ、俺もそれで飯を食ってる一人な訳ですが。

ともかくその組織が今は街に三つ程あり、日夜覇権をめぐりドンドンパチパチとやらかしてる訳だ。

そしてまた翌朝には最悪の場所の闇市におっさんの人肉と薄汚れた血糊べったりの青龍刀が並んだりする。

どの町にもあるのか、此処が特別に最高で最悪なのかは分からんが、とりあえず此処は狂ってる。

そんな狂気の渦中に、あのバカは单身乗り込んだ。

腕に自信があるのは本当らしくて、目に見えて近づくバカは文字通り鎧袖一触されてた。

問題は裏で手ぐすねしているマフィア、中国風に言えば？社会（ヘイシャーホエイ、犯罪組織の事）とかだ。

もしアイツが何かとんでもないことを知ったりすれば、狡猾に罠を仕込み確実に絡め取られるだろう。

一生日の目など見れないだろうし、良くて組織の女に、悪けりや薬漬けで花売さん。

最悪その場で甚振られて使い捨てられてみじめにむごたらしく殺されるだろう。

因みに、因果応報がおっかな過ぎるので、よく見る様な小悪党全開のナンパ男とかイチヤモン野郎は居ない。

主人さんにその内容を濁しながら話すと、

どうやらあいつは俺のお説教（呆笑）が原因であんなことを始めたらしい、という衝撃の事実が発覚してしまった。

俺があのがきを例に挙げて話した所為で、この貧民街全部に興味を持っちゃった。

そしてあろうことか、自分の目で見て自分の肌で感じるために単

身乗り込む始末。

よっぽどやかさなきや、犯罪組織の連中は興味持たないだろうけど、それでもだ。

無駄に覚醒した正義感とかで、売人さんや賭博場に突って全員ノしたりしてみろ。

あいつだけじゃなくて関係のあった人間全部まとめて肉包にされちまう。

そんなことで俺も立場を失いたくないし、やっぱ俺が原因っぽいことでアイツにしなければと目覚めが悪いっちゅうか……。

アイツを素直に嫌えなくなっちまうし。うん。

つー訳で俺はアイツが裏に行く日、後を着けていった訳だ。

その前の日に表で大立ち回り演じてるのを見てたから、

アイツが本物の実力者、ちゅうのは分かってたんで、十分に距離をとってだけど。

裏は、表の主道から2本東へ入ったところから始まる。

正確にはそこから城壁までの五引（一引／23・04m）四方の第九区画の通称だ。

日当たり最悪、主水道からは外れ、最寄の警備兵駐留所は第五区画にしかない。

日は正午以降しか射さず陰湿で、周囲は東南からの風が吹くためよどんだ空気もたまりやすい。なので全体的にかび臭い。

挙句主水道からも外れた所為で、庶民商人文武官問わず人気なし。

地価は暴落し、気づけばよそから流れ込んだ浪民や、仕事を失った町の人間、犯罪を犯した人間がわらわらと群れだし悪化は加速。

そして今に至る、ってわけだ。

しかし、そんなときの張遼は目に見えて元氣無くしてた。

最初は緊張した感じだったのに、たった十歩入り込んだだけで目

を伏せ肩を震わせている。

流石に手当たり次第声を掛けまくったり、偽善振りまく様なバカじゃないみたいだ。

未来にはよくいた、自称人権保護団体（笑）とか、ああいうのは最悪だと思ってる。

そこは好感が……って、なに考えてんだ俺。

それから先はしよぼくれたままで、そのまま張遼も特に何も行動を起こさず区画を一週すると家に帰って行った。

大分凹んでたみたいだった。

この調子なら、ちゃっちゃと帰るだろうと俺も思い、その日はそのまま帰って寝た。

アイツが此処から帰る、って考えたときにちよつとだけ感じた喪失感には気付かないふりをした。

＊＊

二か月後。

何を思ったか、あいつはまた街をうろつき始めた。

長い間動かなかったし、前回で懲りたと思ったんだが、どうやら違ったようだ。

裏でみた張遼は、以前にもまして緊張した面持ちと、何か決意したっぽい稟とした瞳だった。

今日も裏に入った。

その知らせを、雇ってたガキから受けた俺は、急いで小銭を手渡して裏に向かった。

ガキがニヤニヤ笑ってたからとりあえず軽くジャブ入れといった。

裏で、アイツは最初に酒家に向かった。

誰から聞いたのか、裏ではメジャーで、表じゃ絶対知れない様な場所。

つまりイケナイお仕事とかアブナイお薬とかを横流ししてる場所。何故かにやにやと笑い手をひらひらさせてる主人さんの顔が浮かんだ。……まさかねえ？

と、俺は張遼がそこに入るのを見届けると、裏口からこそそこそと中に入った。

幸い俺はその馴染みだったんで、特に聞かれることも注目される事も無かった。もちろん先立つモノはお渡ししてあるけど。

で、俺は何気なくアイツの斜め後ろの席に座る。

アイツは何かそわそわ落ち着きなく辺りを見回している。

一刻くらい待ったころ、アイツの席の隣に、ひよろつとした痩身の男が座った。

……みた事の無い井出達、何処となく落ち着かない様な雰囲気から、男も此処に来るのが初めてらしいことが見て取れた。

が、張遼は気付いてない様子。聞き耳澄ませば、何やらきな臭いお話をしている様で。

時々『死体が』とか『気持ち良くなれて』とか聞こえてきてた。

……うむむ、どうするべきか。って、いやいや、俺は唯見とるだけでもする気はないしだな。

大体今付いてってるのも心配とかそういう訳じゃ無く何となくほっとけなかったただだし、うん。

……あれ？ 自分で言ってること矛盾してね？

なんて自分と葛藤してると、気になる単語が飛んできた。

『癸の通りに行けば分かる』

張遼があの時何を尋ねていたか、今でも知らないが、これは断言できる。

癸の通りで見られる様なモノで、アイツの探すモノは絶対ないって事だ。

（癸、つてのは十干じっかんの、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の事で、

此処じゃ北からの道と東からの道が交差することで出来る四角い街の区画の個別の名称を指す。

三×三本の道路と九マスある各区画で左端の上から乙、丙と順に名付けられている

都市計画の都合上に分けられたらしく、街全体で住人を均一に分けようとしたのが始まりだけど、今はただの呼び名になっている）

癸は街の一番端、貧民街の中でも最悪な場所で、人気どころか生き物の気配さえマトモにない様な場所。

あんな場所にわざわざ住むのは、裏でさらに問題を起こしたバカか、物凄く後ろ暗いことをしている様な連中が、人を食ったり、人を飼ったり、人を買ったりする様な特殊な連中、が好き好んで溜り場にする様な場所だ。

……あんな、未だ住人としては危機感に欠ける張遼なら、ホイホイ付いて行きそうだと俺は思った。

何を言われたか知らんが、目じりに涙さえ浮かべとったし。

……間違いなく、喰われちゃうだろうねえ。

性的にか、精神的にか、肉体的にか、それとも食糧的にかは知らんが。

あの男を俺が見た事がないのも、癸の連中を相手にした事が殆ど

ないからだろう。

癸の地区自体が人の入れ替わりがものっそい激しいのもあるだろうけどさ。

又聞きした話では、癸の区画で商売をした？社会の男は、長くて三ヶ月後には発狂してしまうらしい。

商売相手が異常だったり、商品が異常だったりするから、この街の？社会では懲罰代りに癸の区画に送り込んだりするらしい。

で、おそらくこのところ辺りを嗅ぎ回つとるバカの事が、癸の連中の耳に入っただろう。

どんな用途にするかは知らんが、ホイホイ付いてくるバカを一本釣りして食べちゃおうって算段だろう。

……なんちゅーか、流石にそれは俺としても困った訳で。
目の前で罠に掛りそうな顔なじみをほっとく事も出来ないし。うん。

などと、今思い返せば必死の良い訳にしか聞こえないのを自分に繰り返しつつ。

俺は店主にお金を渡しこっそり暗躍を始めるのだった。

＊＊

その時とった手法は至って単純。

あの怪しい男が張遼を連れだす事でなにか怪しい事を企んでいるのならば、店から出れなくなればいいんじゃないかね？

という単純な発想の元、あの男の懐にちよつと高そうな装飾品を忍び込ませ、お店の中に居る中年女性に一芝居打ってもらうと言うもの。

どちらも此処のことをよく知らない様なのは確認済みだし、他の、店に居た客には既に手をまわしてあるし。

ちよつと騒ぐだけでタダ酒が飲めるってことで概ね好意的だ。

（ ）

んで、結果としては、男は盗んだと言いがかりをつけられた事で頭に來たらしく、

店長に襲いかかったが返り打ち、囲まれボコボコにされた上に、持ち歩いていたらしい媚薬的なお薬のお陰で張遼にもゴミ見る様な目で見られてた。

どうやら張遼を性的に食べようと思ってたらしい。ロリコンは犯罪ですよー。

で、頼んどいたお説教（主に裏の危なさとか、何時でも誰かに狙われているかもしれない事とか）をしてもらい、

俺はそれを見届けたうえで、張遼が帰宅したのを確認してから家に帰った。

流石に懲りただろうと思いつながら。

＊＊

結論から言おう。

アイツ懲りて無かった。

二、三週間は大人しくしてた。

が、一月が経った頃、突然何を思ったか家を飛び出し、向かう先は癸の地区。

進む程に空気は饅えた臭いに、雰囲気は重く陰鬱になってゆく様に、張遼も顔をしかめてた。

道端には死んでるのか生きてるのか分からないナニカが散らばり、世界を呪う呪詛の様に低く唸り声を上げている。

途中、何を見つけたのか、一瞬目を見開いた後激しくおう吐した。

それでも止まることなくよろよろと進んでゆく張遼。吐いた場所の近くには、明らかに幼児と分かる腕がごろりと落ちていた。

二の腕辺りは骨が見えてるから、恐らく食人趣味の連中の食べ残しだったんだろう。

飢えの極限までいって死肉を食べる連中は文字通り骨までしゃぶり尽くすしね。

慣れた人ならともかく、突然こんなのみたらそりゃ吐くわな、と一人ごちながら俺は張遼を追った。

んで、最終的に行きついたのが、俺が最悪の場所と勝手に呼んでる癸の地区の闇市。

切り売りされた人間の足やら、鳥かごの中で泣く赤ん坊やら、死んだまま放置されてる死体やら。

それを見て、張遼は茫然と突っ立ってた。

隙だらけで、俺でも後ろを獲れそうな程だったので何やら邪な事を考えてる連中がそこそ居たが、

それは俺と雇った連中でお帰りしていただいた。

そんな感じで処理しつつ観察していると、突然アイツは泣きだした。よく分からんが何か思う所があったんだろう。

そのまま、隙だらけのまま市場を一週した後、張遼は本格的に落ち込んでとぼとぼと家路についていた。

＊＊

それから、二週に一度くらいの割合で裏や表の色々なところを見て回っていた。

流石に癸の地区には懲りたのか行っていないようだが、それでも表で見つけた女給の仕事の合間に色々なところを訪れていた。

一度白い粉の売り買いに遭遇した時は流石にヤバかったが、なんとか穏便に済ませる事も出来た。

そんな感じで俺はお仕事の合間のアイツの観察とお守り、アイツは市民の暮らしと実情を窺う、といった感じで毎日を通して、

表面上はお豆腐届けの時だけ会う同年代の苦手な相手という関係を築く、そんな日々にも慣れた初冬の今日。

「……あ、毎度ご苦労さん。え、えっと……その……」

と、なった訳だ。

どうしてこうなった。

＊＊

／張遼

「……?」

つ、ついにキタで。一世一代の大勝負や。

目の前には小首をかしげるアイツ。

未だに名前知らんけど、半年の付き合いでそこそこには態度も軟化しとるはずや。

最初の頃みたいに露骨に嫌な顔されることは無くなったし。

……大丈夫、やよな？

ううん！　ここで弱気になってどうすんねん、ウチ！

バシッと気合入れて、さあ行くで！

「あ、あのな……その……」

「あの、俺忙しいんだが……」

「ご、ごめん……でも、時間は取らせんさかい、やで……」

「……………早くしてくれよ……はあ」

「あ、うん……」

出鼻をくじかれてもうた。なんや今の絶妙な間は。

……それにしても、やっぱり相変わらず言葉にとげあんねんなあ。

向こうもなんや身構えとるし。

で、でも、ウチがしてがしたことと思えば当然やし、ここでしっかり謝らんと！

「あ、あんな！　その、前に、アンタに怒られた時のことなんやけどな……」

「ん、あ、ああ。半年くらい前のアレか」

アイツはなんや予想外やったらしく、一瞬だけ目え丸うして驚いた。

でも、直ぐに能面な仏頂面に戻ってまった。表情変わらんやつち

やなあ……。

「そや、それや！」

あんどきアンタに怒られて、ウチ今まで見ようとせえへんかったコトにやっと気付けたんや！

それに、ウチが立場に胡坐かいて見降ろしとることに氣い付かんと、アンタを最低の言葉で侮辱してもうた。

そのことが謝りたくて……ッ。

それに、アンタにや何度も助けてもろてるし！

初め氣が付いたんは最初裏に行った時で……、でも偶然や思ってたなんもせえへんかったけど……

そつから毎回裏行つて問題起きるんとアンタが絶対居つて、ちよつと話聞いたら、

アンタっぽい人が、その、ウチを助けるように、つて……やでな、えつと——」

さあ、言うで。

ウチなりに考えた、ウチが出来る一番の詫びや。

コレで許してもらえんかったら、それこそ頸切るくらいしか無い。

それに、命の恩人への礼や。

なんどもアイツにしてみれば他人でしかないウチを、何度も助けてくれたんや。

見逃せば楽にできるし、アイツ自身に火の粉が降りかかってまいそんな事も、アイツが助けてくれた。

そんな、命の恩人に礼を返すにや、やっぱりこの方法しか思いつかへん。

「ホンマにすまんかった！ アンタのコト知らんと無神経に侮辱してもうて……

それに、マジでありがとう！ ウチ、アンタに何度も危ないトコすくつてもろうて……

やで……こんなんで詫びと御礼になるか分からんけど……

ウチの真名を預けさせて欲しいんや！」

言った……言ってもうた……。

＊＊

「ウチの真名を預けさせて欲しいんや！」

さりげに情報漏えいさせてんの誰だよ……。

ま、いいや。

真名、ってのはこの世界の風習だ。

この“真名”は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前
前で、

本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、特に異性の場合
は
陵辱されるのや、唾を吐きかけられると同等の、

尊厳を最高に侮辱する行為で問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たる。

ってのはお豆腐屋の主人さんの受け売りだ。

十歳の終わり頃に主人さんに初めて出会って、いきなり真名で呼ぶっちゃう暴挙を成し遂げた俺は、そこで初めて真名という存在を知った。

それまで、俺は誰かに名前を呼ばれることなんてなかったし、俺も人を名前で呼ばなかった。というか呼ぶ相手が居なかった。

なので、とある機会で知り合った、この上手く媚びれば助けてもらえそうな主人さんに好印象を持たせるべく、

俺は主人さんとその場に居た男性（後から知ったが彼は主人さんの兄だった）との会話から得た、主人さんの愛称らしき呼び名を使い、御礼を言った。

瞬間、その場が凍った。

そして一転、先程まで温かく見つめていた主人さんの兄は俺に包丁を突き立てるわ、

主人さんはおろおろ狼狽し半泣きになるわ、俺は俺で全く持つて意味が分からずとりあえず刃物に逆らわないようにするわで。

完全に場は大混乱。兄さんの荒い息づかいと、主人さんの啜り泣くような声と、何もできない俺。

そしてそのまま膠着状態が続くこと二刻（約三十分）。

漸く落ち着いたらしい主人さんが、俺に説明と謝罪を求めた。俺は未だ意味が解らず主人さんに聞き返し……。

それで、今に至る訳だ。

もちろん、あの時は意味を聞いてから俺は文字通り平伏して米つきバツタみたいにぺこぺこひたすら謝り続けた。

なんとか許してはもらえたが、三年経った今でも主人さんに頭が上がないのは七割真名を呼んだ所為だ。残りは働かせてくれた恩、それくらい、真名を穢すことは数年かけても清算できない程の無礼になる様だ。

俺自身身を持って現在進行形で体感中なわけだし。

因みに乙女ちつくに泣いた主人さんは三十二歳。三十路って言う
と血を見ます。

行き遅れって言うときクラブでスプラッタな現代アート風オブ
ジェになれます。

＊＊

と、主人さんは置いといて。

話題は真名の重要性に戻る訳だが。

つまり主人さんの例の通りだ。

礼（苦笑）を重んじる儒教社会で、最高最悪に相手を侮辱する行為が、真名を許しなく呼ぶこと。

名前なので、うっかり間違える場合も無きにしも非ず、ではあるけども。

故意じゃ無くとも、しっかりとした謝罪をせねばならず、

基本的に絶対に倫理的に許されない行為、という解釈で間違いない。

ある意味扱的には現代（この場合は未来か？）社会でのタブー、殺人などの命を奪う行為と一緒にだと思われる。

履歴書などという概念は存在しないが、過去に故意に真名を呼んだ人間の信用は地に落ちるので、

何かの拍子に真名に対する礼を欠いたことが発覚すれば、雇用や就職の機会を得る事すら難しいそうだ。

殺人に似ていると言った所以はこの辺りにある。

日本でも犯罪者の再就職は難しく、それが再犯を招くと軽く社会問題になるだろ？

まあ、社会保障制度や、人権などといった概念がないこの時代では、一度犯した失態を取り戻すのはほぼ不可能で、

失った社会的立場を取り戻す事もほぼ不可能。保障体制何ぞある訳がなく。

一度失態を犯せば相手の許しを得られない限り何もかもを奪われても泣き寝入りするしかない。

貧民街、特に裏の連中の何割かは真名絡みの問題で居場所を失った人間だったりする。

まあ、生きてる彼らは運が良い方で。

許す許さん以前に首と胴体がお別れして生命的な意味で泣き“寝入り”する羽目になることも少なくないそうだ。

そう考えると、主人さんで失態を犯した俺は運が良かったのかもしれない。

無論、そんな事を人前で漏らせば俺もスクラップでスプラッタな現代アートになること間違いなしだ。

尤も、未来人の俺としては強力な拘束力や抑止力にさえなり得るその風習を、

何故利用しようと思える人間が居ないのか、それが不思議でならなかった。

何処の時代でもプライドなんぞ豚にでも喰わせとけ、なスタンスの人間は居ると思っただが。

？ 社會の人間でも、それはタブーとされてるみたいで俺は驚いた。イスラム教圏で特定の動物の肉を絶対に食べないとか、そういうレベルの問題なのかもしれん。

生と共に在り、極端に身近で犯されざるべき領域だからこそ、誰も疑問に持たないんだと思う。

これって、真名預けた相手から裏切られたら余裕で死にたくなるレベルで絶望できるんだろうなあ……。

さて、それほど重い真名だが、

勝手に呼ぶ行為の無礼度に比例し、預ける相手に掛ける信頼もとんでもない値になってしまふ。

具体的に言えば、恋人なんぞ通り越してもう比翼連理な関係だったりとか己の半身レベルの親友とかそういうレベルの信頼を預ける相手に渡すモノ。

例外的に無条件で呼ぶのは、親や同腹の兄弟とかそんなんだ。下手すると、夫婦同士でも預けない事もあるそうだ。

政略結婚で側室入りした娘とか、そんなんだけど。

それに、相手の本質を指す、などと神聖性の極めて高いモノという認識なので、

呪術とかそんなモノを掛けられる可能性も多大にある為（冗談ではなく、マジで。妖術なる怪しげなモノを取得してる人間が實際居るのだ）

うっかり外で大声で呼んだりすれば真名を預けられる程の相手からの信頼を失ったり、

下手したら親友同士、愛し合ってた者同士で血を見る羽目にもな

る。

ドジっ子がシャレにならない社会なのだ。

なので夫婦間では閨の中とか、家庭内とか極めて密閉性の高い空間で呼び合い、

家族ならば同様に家庭内でのみ、親友ならば、第三者が居ない場合のみ、と極めて局地的な場でのみ使われることとなる。

＊＊

で、この張遼は俺にそれを預ける、と言ってる訳だ。

正直、俺にはこの制度が重く感じていた。聞いた時から重く感じて仕方なかった。

すごい重いから、もう両肩にかかる重圧とか責任とかが想像しただけでも半端じゃないから、

預けられる様な事があっても断ろうとさえ思ってた。

それに、真名を預かってうっかり口を滑らせた日にゃ命を狙われる理由がもれなく一つ追加されてしまうし。

それほどの信頼を寄せられる、ということはとても名誉なことらしく。

でも俺は今まで信頼とかとは無縁な生き方をしてきた訳で。

うん、考える程重く感じる。

俺は主人さんから聞いた時から思ってたんだけどさ。

明らかに呼び名一つの扱いが重過ぎだよ。

こんなん貰っちゃったらもうどうにもならない訳でさ。

のほほんと、高校生時代も転生してからも、そういうプライバシートな責任とは無縁に生きていた訳でさ。

やっぱり重すぎるよ！ と今でも思っではいる訳なんだが……。

しかも責任は極々個人的なモノなのに、欠けば社会的地位まで失う訳だ。

……重い上にめんどくさい、と感じる自分が居る訳だ。

と、思わず叫びたくなる気持ち、この時代に分かる人は居ないんだろうなあ……。

たぶん、飛行機を発明したライト兄弟とかしか分かってくれる人居ないんじゃないかしら。

鳥しか空を自由に飛ぶことが出来ない、ってもう赤ん坊レベルの常識と正面から戦った経験がある人しか。

重くて仕方ないそれ。

でも、だ。

何処かで、その真名を預けられるという事実を、喜んでいる俺が居るんだ。

……俺の主張としては、完全に真逆だったはず。

それなのに、だ。この張遼という女の子から真名を預けられることを喜んでいる俺が居る。

自分に困惑する。

もう、何が自分の意志なのか分からないんだ。

そんな情緒不安定な俺が取れる選択肢と言え……。

「えっと……、とりあえずさ、なんで？」

時間を稼ぐ事くらいだった。
とっくに答えが出てる内心に、わざと気付いてないふりをして。
ツンデレ乙、と何処から及川の声が聞こえた気がした。

＊＊

／張遼

ま、まさか「なんで？」なんて、返されるなんて思ったらなかった。
た。

今まで、真名を預けた事なんて無いけど……。
普通は真名を預けられたら、飛ぶように嬉しいモンやろし、
ウチも預けられたら、信頼されたんやー、って嬉しくなるやろし。

……まさか、なんで、って。
やっぱ、相当怒っとるんかな……？

かなり心にグツとくるもんがあるわ、あの反応。

……でも、ウチがアイツにしたことはそれくらいの事なんかもし
れんし。

……うん！

決めた。アイツにどんな反応されようと、ウチは自分に負けん！
ウチなりのけじめや、けじめ。

アイツと、仲違いしたまんまになるかもしれんのは悲しいけど…。

ウチが謝って、訂正しんことは進まんのや。

それに、アイツには助けられとるんや。

何遍も、ウチはアイツのお陰でいま生きとるんや。

やで……。

「なんでもくそもあらへんのや！　ウチがアンタに恩を感じたで
！　ウチがアンタに謝りたいで！　そんだけや！

別に許してもらえんくても構わへん！　でも、真名だけは受け
取って欲しいんや！

許せんなら預けてくれんでもええ！　ううん、許せてもウチが
信じれんなら全然構わへんわ！

でも、これはウチの謝罪の気持ちやさかい、受け取るだけでも
して欲しい！

だめなら、ウチじゃ一生かかってもアンタに恩返しも謝罪も出
来へん！　もう自害する覚悟もできとるんや！

やで、ほんま済まんかった！　あんときのウチは考え無しやつ
た。許してもらえんともおもつとらんけど……

ウチの出来る限りの誠意やさかい、受け取ってだけでも欲しい
んや……。

ホンマに……ありがとう、ごめんなさい……」

＊＊

『ホンマに……ありがとう、ごめんなさい……』

……うん、重いよ！

まあ……なんて言える訳ないんだけどね。

それに、彼女の決意を聞いて、あり得ない位喜んでいる俺を、俺ははっきりと自覚している。

本気なんだなあ。俺でもわかる。

精神がこの時代じゃなくてもさ、張遼が本気、っちゅうことはひしひし伝わってくる。

重要性を知ってる分だけに、ね。彼女の決意が聊か早計な気がしない事も無いけどさ。

それだけの誠意をもって、対応してくれている、って事が凄い。俺じゃ絶対出来ない。

それに……やっぱりどこかで嬉しいと思う俺が居る。

重い重いと避けていた筈なのに、俺は嬉しくて仕方がない。

謝罪という形でも、俺に預けてくれる、という選択肢を選んでくれたことが嬉しくて仕方がない。

いつもは冷静で無関心で、一步引いたところに居て利益を窺うスタンスの俺が、

いや、生きる為にそうせざるを得なくて、そうすることが普通になっちゃっていた俺が

感情をあらわにしたくてうずうずしてるんだ。

そっか……やっと今腑に落ちた。

あの時俺が頭にきたのは、コイツと会話するのが楽しくて、気付いたら素になれて、嬉しかったからなんだ。

だから、あんなちっちゃいことでキレちゃったんだし、でもあの後も見捨てたり興味無くしたり出来なかったんだ。

もうツンデレここに極まりだね……及川に文句言えねえや。

……よし、決めた。

「……えっと、張遼が誠意をもって、俺みたいな孤児に対応してくれてんだ。

怒る怒らないとか、そんな細かいことで怒れる訳がないじゃないか。うん。

それに、あのさ、いまさただけさ、俺元々あの時はなんだかおかしかっただけで……

えっと、その、なんだ……俺、お前が思う程立派な人間じゃないけどさ……。

……その、誠意には誠意で答えなきゃいけない事くらいは分かるから、えっと、なんだ……その……」

「？」

俺が言葉選びに迷っていると、張遼はこく、と首を傾げた。

ちよっと視線が辛い。

「俺の生家の姓は高で、名と字は持ってない。てか貰ってない。

こんな乞食に、えっと……その、真名とか、撤回したほうがいいと思うんだけど……」

ああ、違う。そんな事が言いたいんじゃない……。

って思ってたのに、俺はいつの間にか妙な方向に口走ってた。

いや、俺も嬉しいのに、なんでまだ素直になれないんだよ……。でも、俺が他人のコト心配してるなんて……。やっぱ何か変わっていか……。。

というかなんで俺が関係の無いことの心配をしてるんだと。

とりあえず、張遼相手だと調子が狂っちゃうよ……。なんていうか、打算的になれないって言うか、妙に素が出るっていうか……。

やっぱ、あんとき怒った理由も子供じみたもんだと再確認。

俺、ただ初めて信じられそうだった人に、勝手に裏切られた気になってたんだ……。

勝手に俺の境遇を分かってくれてるって思って、何も知らない相手の当然の反応に怒ってただけなんだ……。

はあ……。俺……。ガキだなあ。

気使かいとかそんなの、もうとつくに忘れてた筈なんだけども……。。

いつの間にか、真名の重さより、預けられた嬉しさが勝ってる俺って、とんでもなく現金な奴なのかしら。

……。ああ、変なこと言っちゃったよ。訂正したいけど、無理だろうなあ……。

冷静に張遼も考えれば、俺と真名を交換することの無意味さがわかったやうわけだし……。

はあ……。

「そんなことないっ!!」 アンタが乞食とかそんな立場とか関係あらへん!

ウチは、アンタっちゅう人に預けたんや! あんたの立場預け

たんにやない!!」

でも、飛び出してきたのはぶれない彼女の言葉だった。
単に向う見ずと言われればそうなのかもしれないけれども。
打算と損得で生きてきた俺にとって、初めての存在。

どうすれば、こんなに人間らしいのに、こんなに真っ直ぐな人が
生まれるのだろうか。

「っ……、マジで、言ってるの？」

「うん、マジもマジ、大マジや！　ウチがそうやって選んだんや、
文句なんて言わせんわ！」

「……っ」

いかん、なんで俺が謝罪を受けてるのに泣きそうになってんだ…
…。

落ち着け、深呼吸深呼吸。

「……それで、アンタは……えっと、どうなん？」

不安そうな緑の猫目が、俺の姿を映した。

吊り気味に凜とした眼差しが、半年振りで妙に懐かしく感じる。

「えっと……謝罪を受けるよ。……ホントに、えっと、その、な
んだ……ありがと」

「え……ホンマに？　てかありがとってなんやねん、え、なんで
ウチ御礼言われとんの？」

「あー……、それは気にしないで」

「？ ま、ええわ。ウチこそ、ホンマにありがとな！

えっと……ウチの真名はな、霞や！ かすみって一文字書いて、
霞」

花が咲く様な、紫陽花の花の様な笑顔を浮かべる張遼。

一瞬、胸の鼓動がどうしようもなく高まった。

……なんだ今の。俺、今どんな表情してんだ……？
落ち着け、落ち着け俺。

「……俺の、真名は……一刀。一つの刀で、一刀」

俺が真名を渡すと、また綻ぶ様な満面の笑みを浮かべる。

快活、元気、夏の青空……そんな印象を受けた。妙に詩的で変に
恥ずかしい。

でも、俺と真名を交換したことで、その笑顔を浮かべさせた、つ
てことがどうしようもなくうれしい。

うん、こりゃアレだ。真名で邪な事なんて考えれんわ。

「そっかあ！ よろしくな一刀！ ホンマに、マジで、よろしく
なー！！」

「ああ、うん。よろしく、霞！」

＊＊

「よろしく、霞！」

……っ!?

な、なんや!?

アイツ、あ、違った。一刀の笑顔を見た途端に、ウチの心臓が言うこと効かん様になってもうた。

もうばっくんばっくん言っ取る。止まらへん。

「……? どしたの、霞?」

……ん? なんや今顔が真っ赤になってまってヤバいんやけど。一刀の声色が、なんや氣いつかってくれとるみたいな感じになっ
てまっ取る。

あー。心配させたんかな?

とりあえず顔を上げ……

「わっひゃあ!? な、ななんや一刀いいいきなりびっくり
したやんけ!」

「え……俺の方が吃驚だよ? どうしたんだよ霞」

「あわ、あわわわわ! や、止め、真名呼ぶのいっぺん止めてや」

目え上げたら目の前に一刀ん顔。

ま、またや、心臓がウチの制御から離れてまっ取るよう……うう
う……。

ヤバいめっちゃ顔熱い。

ただでさえなんや知らんけど顔見ただけでヤバいのに、
真名まで呼ばれたら、なんか、もう……こう、胸の編がきゅんき
ゅんしてまう。

なんやもう! 訳が解らんへんわっ!

「え……、あ、そっか……ごめんね、し……張遼さん」

と、おもったつたら、一刀がなんやしよんぼりしてもうた。
……あ、う、ウチのバカ！ あの違い方はどう考えても不味いや
ろ！

「あ、う……えつとな、そう言う訳や無くてな……なんていうか
な……その」

「えっと、やっぱり親しくない男に呼ばれるのってアレだよ……
はは、うん、真名は預かったけど、俺は呼ばないからさ……」

「だーっ！ だからちやうねんてば！ 全然真名で呼ばれるの無
問題や！^{まんだい}

むしろ呼べや！呼べやがれくださいや！」

あかん、テンパって自分で何言うとするか訳分からん。

「あ、じゃあ、えっと、霞……？」

「わっひやあああわわああわあっわああああわわわああ……！？」
やっぱむり！ なんやもう訳分からんこそばゆいわ！」

「ど、どうしたの霞？」

「ひうつ！？」

「し、霞？」

「あわ……あわはわわ……も、」

「も？」

「もう勘忍してやーっ……！」

「ちょ！ 霞どこいくのさ……！」

「うつひやああああああ！？」 ウチもうむり！無理！絶対無理！

煩惱退散、悪霊退散！」

.....

.....

.....

「.....なんの騒ぎだあ？」

「ふふっ、若いっていいわねえ」

そう呟いた主人さんとその兄さんがいたとか居ないとか。

二章：一

＊＊

二章

＊＊

恋とは精神病の一種だ、といったのは何処の誰だったか。

俺は、この意見に全面的に賛成する。

なにせ、恋する乙女とか言う地球外生命体は、著しく情緒不安定となり、

訳の分からないことで直ぐ不機嫌になり、機嫌を直すには甘いものが必須であるからだ。

それに誰への贈り物だか知らんが、わざわざ俺を狩り出してやれ
買物だ、やれ料理だといちいち俺に何でも試す。

アレだけそわあせあせしていれば誰だって霞が恋する乙女だと
気付くだろうに、

アイツの想い人は相当な朴念仁らしいな。

と、俺は、誰に恋してるか知らんけどさ、と不機嫌な霞にそうだ
ろ、と確認をとれば益々不機嫌になった。何故だ。

某ジャイアニストな良い奴じゃないけど、心友の恋は応援するベ
きじゃないのか？

霞が一体何に対して気に食わないのかさっぱりわけがわからない状態だ。余計な御世話だと言いたいのか？

つん、と顔をそむける霞を横目に、俺はオシャレなカフェテラスつまり最初に霞とお茶をしたあのある意味思い出の場所で、憂鬱な気分を溜息で履きだした。

さて、何故そんな恋だの乙女だの乙女チックな話題を選択するシチュと、霞と共にお茶をする事になったかと問われれば、こう答えねばならない。

敢て言おう！ リア充ではない、であると！ 総帥で言った意味は特に無い。

霞と俺は真名を預け合ったいざこざの直ぐ後、翌日の外出の約束を取り付けたのだ。

べ、別に霞をデートに誘いたかった訳じゃないんだからね、とテンプレートな反応は蒼空に消え。

俺は単純に、互いに真名を預け合っても、やはり互いの詳しい事は知らないのです、

どうせなら親睦を深めついでに真名で呼び合う事になれてしまおう、という訳だ。

ちなみに霞はやたらとテンションあがった所為か、夜なかなか寝付けず朝遅刻するという遠足前の小学生の様なことをやらかした。

ただ友達同士で遊びに行くだけだろ、と言えぱやっぱり不機嫌になった。何故だ。低血圧だったのか？

と、そんな初回の思い出は置いといて。

遊びに行くと言う、簡単かつさっさと親睦を深められるソレもは

や十数回、三日に一度計算でも一月、飽きもせず回数を重ねている。最初こそ、あの酷いどもりが治らずどうしようもない様な感じだったけども、

最近は何を悟ったのか、諦めたような調子且つ、今じゃよっぽど不意打ちでもない限り普通に会話できるレベルまで落ち着いてきた。

それで、ただ今絶賛十数度めの逢引中。ツイッターでもあれば“美少女とお出かけなう”等と呟いて及川を爆死させたいところだが。生憎ケータイもパソコンも文明の利器は何もなく、俺のポケットは空っぽだ。

ついでに言えば俺のお財布の中も空っぽだ。まあ、男の甲斐性の見せどころとは言うかもしれないが。

だからって、ねえ。

「杏仁豆腐を十七杯もおかわりするバカが何処にいますか、と。聞いてんのか、霞。そんなに俺の経済状況に止めがさしたいのかさうなのか」

「ここにおるわーっ、なんて。ええやん別にい……大体一刀が好きなだけいいって言ったんやし。生活費別枠でとっとるんやし。

大体初めっから遊ぶ金っちゅう風に持ってきてとるんやし。出し惜しんでどーすんやねんっ」

くっ、この猫目少女、どうしてくれようか。

まあその辺は最初の失態から学んでるんだけどさ。親しき仲にも礼儀あり、って知ってる？

……でも、まあこのまったりした空気も悪くないよね。
なんて思うある晴れた冬の日の一幕。

＊＊

／一刀

金は、人を狂わす魔力を持っている。

そうに違いない。

時に冷静な判断を欠かせ、時に金の為なら命でさえ投げうつてしまふ。

しかし、それは選択できる人間だけが許される行為であり、判断だ。

たとえば孤児の俺は、先ず選択肢がない。

選択できる人間に、スズメの涙ばかりの金でいい様に使われ切り捨てられる人種だ。

俺は、自身が最下級層に居る事を、初めて呪った。

＊＊

北の果て并州に、冬がやってきた。

そして、阿片と麻黄が一緒にやってくる。

并州の冬は、一面白銀に覆われる厳しい季節。緯度的には北海道とかそんなもんだと思う。

つまりかなり寒いって訳だ。

そして、雪に包まれる季節には、支配階級共の娯楽が存在しなくなる。

（無論、一般階級はタダでさえ生きづらい環境が悪化するのでそれどころじゃなく、生きるのに精いっぱいだけど）

狩り、遠乗り、屋外で行うものは当然不可。食もたまに訪れる行商人が持ってくるモノと保存食のみ。

さらに外出なども、わざわざ吹雪の中を突っ走る自殺行為をする様なモノ好きは少数派な為で、自然と閉鎖的かつ内向的になる。

そんな中で、人間は何に走るか。

一番多数派なのが、快楽だ。特に性的快楽、精神的快感を求める。もちろん、芸術、文学、自己研磨等を楽しむまっとうな人間が居ない訳じゃない。

しかし、常日頃から怠惰に耽る人間は、簡単な快楽を求めてしまう。

お陰で冬になると、并州のこの一都市では性産業が活発になった。

それだけなら、良かったのだが。

それが、付け入る隙となったのは何時の頃からか。

何代か前の領主が関税を緩和したことをきっかけに、目ざとい黒社会や侠の人間達によって、多量の薬物が流れ込むようになった。

そして、その高揚感と快感に目を付けた一人の支配階級層の人間がいた。

薬が与える高揚感と恍惚感に魅入られた彼は、セックスのような単純な享楽目的にアヘンを使用する様になった。

脳味噌から無理やりドーパミンだか何だかを分泌させて、仮想の幸福を楽しみ、偽物でホンモノな快感を味わえりのだ。

先立つモノさえあれば、吸いこむだけで気持ち良くなれるソレは瞬く間に蔓延した。

しかし、快楽を求める探究心は留まりを見せず。

連中は早々と時間をかける事も無く薬とセックス両者を組み合わせた最悪なコンボ、

麻黄まわうを使つての性行為を見つけた。

コレの場合は、高揚感により快感が増幅する様に感じるのではなく、

実際に性的な行為をした場合の快感が数倍に跳ね上がる。

なので、娯楽に、特に快楽にどん欲で、懷事情に余裕のある連中はさらにこぞってこれを求めた。

お陰で、裏も表も市場には薬が大量に出回るありさまだ。

并州はもはや帝国一といっても差し支えない程の一大市場へ拡大した。

麻黄、とは元々漢方薬の一種で、本来は風邪薬に使われる漢方薬の一種だ。

具体的な効能は、倦怠感を取り除く薬として処方されている。

これだけならまだ良い。タダのまっとうな漢方薬だ。

しかし、麻黄をさらに煮詰め高濃度の白い結晶としたヤツは、覚せい剤となる。

疲労状態から簡単に回復させ、眠気を覚ます上に、さっき言ったように快感の増幅と激しい高揚感。

そして、一定量以上服用した場合に起きる強い嗜好性と、習慣性の依存状態。

所謂麻薬中毒者と一緒の状態に陥らせるのだ。

たまに、自身の意志で薬をコントロールし、依存症にならず快感だけを味わえる人間もいるが。

俺の知るユーザーの六割程は数年で廃人となるか、薬切れでウリって自殺してしまう。

支配階級や大口の連中は、俺はあつた事がないので知らん。売人毎にお得意様が決まっているからね。

俺が任されているのは中級階層、つまり一般街の人間相手の商売だ。

扱うのは需要が増える冬に限るけど。

因みに、薬物自体は此处では全く違法でない。依存性、危険性を誰も知らないからだ。

日本が戦後しばらくの間ヒロポンの名で覚せい剤を公式販売していたのと同じこと。

官営の薬があり、表向きは薬の取引は塩や酒と同じ様に国の主導で行われて居る事になっている。

しかし官営のモノは総じてぼったくりである法則は、薬にももちろん当てはまる。

一般の人間にはとてもじゃないが手が出ない程非常に高い為、塩と一緒に俠系の組織や黒社会達の手で密売されているのだ。

俺は街をし切る黒社会からの下請けで販売のみをやっている。もちろん薬自体はセーフでも密売なのでアウトだ。

罪悪感を感じないのか、と問われれば嘘になるが、正直自身を生かすのに必死になるうちに、

見ず知らずの他人が死ぬこととかどうでもよくなっちまってる。

しかし、だ。

それが、見ず知らずで無い人間に降りかかる羽目になるとしたら。

……俺は、どうするべきなのだろうか。

＊＊

／霞

びゅうびゅう、って風が吹き付けて、さらさらの雪が戸の隙間に積もつとる。

昨日までの晴天はどこへやら、并州に本格的な冬が来た。

そんな中で、ウチといえば……。

「くっ……雌雄を決す時が来たみたいやな……っ！」

「肉体性能の違いが、戦力の決定的な差じゃない事を教えてやんよ！」

ズババツ！

「なっ、反応が、間に合わないっ!? 何故だっ!」

「ふっふーん。戦いとはいつも2手3手先を考えて行うものや! さあー、次行くでっ!」

シュツ!

「あ、そっちに」

「声に出すとは甘いわ、貰たでエ! って、コレ白菜やん!」

「霞は良い友人だったが、キミの箸使いがいけないのだよ」

「一刀! 謀ったな、一刀おーっ!」

「……」

「……」

「んじゃ、次の肉入れるか」

「……いきなり普通のノリにもどんなや」

「ま、いいじゃん」

一刀と二人で火鍋をしとる。

何やら良く分からんが、大きな金が動くちゅうことで一刀にもまとまった収入があったみたいで。

どうせなら霞と何か飯でも食おうっちゅう事になったらしくて。

んで、今朝誘われて、冬風吹き付ける中一刀の家に行ってみれば火鍋の道具と具材が所せましと並べてあった。

んで、気付けばあんなノリで肉を取り合っていた訳や。

楽しいからウチ的には無問題。一刀はちよつと疲れた顔しとるけど。

「……んま。はふっ、熱っち、ふうーっ、ふうーっ」

「ん……はふ、はむ……」

一通り騒いでからは、かちゃかちゃ、って食器と箸が当る音と、はふはふ食べる声だけになった。

さつきから一刀が妙にもじもじしとる。どしたんやろか？
なんや悩んどる感じやけど……。

「なあ一刀」

「っあ！？ あちちっ！？ 熱っ！ 霞、布巾とって布巾！！」

……それに明らかに挙動不審。

「ほい布巾。……じいーっ……」

「あ、ありがと。 な、何かな？ 顔になんかついてる？」

「目と鼻と口がついとる。じいーっ……っ」

試しにじっと見つめれば、一刀は直ぐに視線を少し下に下げた。
んー、やっぱし、一刀なんか隠し事しとるな……。

「や、止めろって」

「一刀、ウチの目え見てや」

「何だよいきなり……」

「なんや一刀、ウチに言えんような事があるん？」

「っ！？ そ……そんなこと無いよ？」

うん、絶っ対なんか隠しとる。

アレやね。何となくやけどこれは、なんや後ろめたい事隠しとる
顔やね。

「……一刀って、嘔吐いた時左下に目線反らす癖あるの気付いと

る?」

「え、マジでっ!？」

「むうつ、やーっぱ嘘ついとったんやな!　ウチに何隠しとんねんよ?」

はあ……言うてみいや、隠しとったことは怒らへんから。てか言つてえな。ウチ、一刀が困つとるんなら力になりたいんや」

ん、ちょっと押しつけがましかったかなあ。

でも、一刀ん心配しとんのはマジやし……。ん、まあ一刀が嫌そうや無いんならいっか。

「……聞いて、怒らないでくれるか?」

あや、こない不安そうな表情一刀もするんやな……。

でもや、ここで何も出来んなんて女が廢るっちゅうもんや!

「内容によるわな。まあ、話し終わるまでは手え上げんといてやるさかい」

「ちつとも安心できねえよ……ははっ」

「あ、ようやく笑ったね」

ちゃんとした笑顔ってエラい久し振りな気がする。

「へ?　俺そんな仏頂面だった?」

「んん、なんちゅうか、仏頂面やなくて、不自然やったっちゅうか?」

むうー、上手いこと言葉にはでけへんけど、こう、ぶわあーって感じの違和感?」

「なんだそれ。……まあ、ありがとうな。お陰でちよつと気が楽になったよ」

「にゃは、このお代は高う付くで？」

ウチの一言に、曖昧な笑顔で一刀は返すと、徐に口を開いた。

＊＊

「まず、コレは前提条件ってことで知って欲しい。

俺は犯罪組織の下っ端且つ一員で、麻黄を売ってるんだ。

もちろん、やることすること全部違法ツちゅう訳じゃあないけど……。

少なくともお天道様の元を胸張って歩ける人間じゃない」

……早速予想の斜め上やった。

まあ、今は聞くことに徹するて決めたんや、黙って聞こう。

ウチは、続けて、って手を振った。

でも麻黄ってなんやろ。

「ん、ありがと。

それで、その今回の、命令の内容が問題なんだけど……そのな、霞との繋がりを使って、太守張越以下十三名の文武官に白胡を売り込め、って」

「はあ。なんや、てっきり変な前置きするで、一刀が刺客とかそう言うんやっただんかと思ったやんけ」

「いや……刺客って言い得て妙かもしれないよ。てか霞、白胡も黒胡も知らんの？」

一刀はなんや驚いた顔しとる。

ウチ変な事言ったかな？

「うん、ウチは聞いたこと無いよ？ それって何なん？」

「黒胡は、阿片って言えば分かる？」

「ああ、阿片な。あの気持ち良くなれるっちゅう奴やろ？」

「うん。まあ認識としちゃ間違っただけ……阿片の副作用知ってる？」

「ふくさよう？ 知らんよ、どんななん？」

「身体能力の低下、呼吸器、脳機能の低下と依存性、幻覚、精神崩壊や分裂、最悪死ぬ」

「なっ……マジで？」

「うん、マジで。まあでも、ぶっちゃけアルコール、あ、お酒ね。それと変わらんし、飲み物が煙草に変わっただけって認識でもいいんだけどね」

「マジか……それって、阿片がおっかなくないんか、酒がヤバいんか、どっち？」

「どっちもヤバイね」

「マジでか……」

お酒ってそないヤバイモンやったんか……。

ちよっと意外や。皆普通にどっちも飲んで吸っとるし。

「まあ、黒胡は置いといて。問題は白胡だよ」

「白胡ってのも黒胡やお酒みたいなモンなん？」

「ん、まあ認識としちゃ間違っただけだよ。ただ問題はね、お酒や黒胡の二、三十倍は危険なところかな」

そう言うと、一刀は腕組みして考え込みだした。

直ぐに顔上げたけど、ちよっと悩んどるんか眉間にしわよっとなる。

「白胡はね、使用すると、自分らしさが失くなり、性格が壊れて、社会適応ができなくなるんだよ。」

体に影響を与える方としては、

何も食べなくても眠らなくても平気で、疲労を忘れたり、痛みを感じなくなったり、一種の超人みたいな感じになるようだし。

あと、性交中の快楽が数十倍になったり。

でも、副作用は強いし、だんだん大量消費をするようになるんだよ。

ものっそい依存性が高いからね。んで、心拍が異常に速くなったり、けいれんが起こったり。

幻覚が見えたり、妄想と現実の境目があいまいになったり、呼吸停止して、死に至る場合も少なくない」

「なっ……そないにヤバイモンがなんで普通に出回っとるんねん！

大体何で一刀も……」

「んとね、国は気付いてないんだよ。この白胡を使い続けるとどうなるかって。」

表面上はたんに物凄い気持ち良くなれるお薬ってだけだもん。

乱心したら殺せばいいんだし、勝手に死んだらその役職を公売に掛ければいいんだし」

「……おわっとんな、天子も、国も」

「そーだよ。因みに貧民たちは皆とっくにそんな事気付いてるよ」
「ならなんで」

「弱いからだよ、霞も知ってるだろ。俺達は弱いんだよ、だから強い人間の事は解らんし、どうにもできないんだよ。」

言い訳みたいになっちゃうけど、俺がどうにもできず言う事を聞いているのも一緒の理由ね。

やれ天子だ、やれ皇族だなんて言われても大き過ぎて見えないんだよ」

「っ……本当に、どないなっとなねん」

「……っと、話が逸れたね。」

それで、俺がそんな危険物を霞の父親とかその辺に売ろうとしてる理由だけどさ。

俺を飼ってる黒社会の組織の一つが、気付いたんだよ。薬の持つ依存性に」

「それって……つまり官を乗っ取ろうとしとるっちゅうこと？」

「ご明察。役所ごと薬漬けにして薬の奴隷にした連中を通して支配しよう、ってのが最終目標ね」

「でも一刀、そんな事したら中央にバレてまうんやないの？」

「監察官がどんな人間かは知らんけど、こんなデカイ貧民街作っててもお咎め無かったんだし袖の下でどうにかなるんだろ」

「確かに……」

納得できてまうのが嫌やけど、実際賄賂もらったりそうやしなあ……。

「ん、こほん……で、霞は反応それだけなの？」

「それだけでなんや一刀、怒って欲しいん？」

「いや滅相も無い。でも俺、霞の父親を廃人にして傀儡にしようとしてるんだよ？」

「身内の恥やから言いたくないんやけどなあ……オトン今も傀儡みたいなもんやよ。実際に一番偉いんは筆頭文官のおっちゃんはずやし」

「マジッすか？」

「マジッす」

「マジッすか」

なんや今のやりとり。

「でもさ、こう、なんつーか、儒教的に親大切にするもんじゃ無くて？」

「年に二、三回しか会わんおっちゃんをオトン思え、っちゅうのも無理やない？」

「あー、納得」

「やろ。その黒社会の連中がなんや民にめちやくちやするとかそーいうんとちゃうなら、ウチは別に構わへんのよ」

「そこは大丈夫だと思うよ。俠系の連中は荒っぽいけど差別主義者じゃないし、てかほぼ全員虐げられる側の出だし」

んー……すつとウチ的に問題なことってあるのかなあ？

「じゃあなんも問題ないやん。別にオトン頭がイッてまうだけで死ぬわけやあらへんのやろ？」

「まあ多分」

「多分て……まあええけど」

多分今更父親面もせえへんし、ほぼ他人やもんなあ。

「いいの？ 俺ある意味親の敵になる訳だけど」

「ソレ言ったらオトンもオカンの敵やし。ウチの片親、妾どころか侍女で、その侍女はん殺したのウチのオトンやし」

「マジッすか？」

「マジッす、ってなんや一刀、この言い回し気に入ったん？」

「まあそこそこ。んで、じゃあ何、霞がこんな放置なのもいつものことなの？」

「せやなー……オトンには今ントコウチしか子供が居らんし、ウチをしゃーなしに育ててくれたんやと思うで。」

嫁殺しより子殺しの方が聞こえ悪いやろ。やでいちおー世間体とかあるさかい。

大体太守の娘が侍女ん子なんて言えへんし、ウチにも隠す為にもう亡くなった前妻さんの子ってことになったよ。

んでも所詮は遊びで出来ちゃった子やし、ちゃんとしたヒトから子供生まれたらウチ、多分用無しなるんや無いかなあ？」

「あー。えっと、その、ゴメン……霞も複雑なんだな」

ありやりや、一刀がしゅんとしてまった。

うーん……ウチ、きにしとらへんのやけどなあ。

「別に一刀が落ち込むこと無いで？ あった事も無い親に別に憧れんし。」

大体ウチ見たいな境遇の子なんて腐るほどおるやん。一刀もせやし、ある意味ではオトンに感謝しとるし」

「なんで？」

「だって、ウチが武官の真似ごとしたりしても気にしんし。あと縁談とか断ってもなんも言われんし」

「縁談……ってええっ！？ 何、霞結婚するの！？」

「いんや、せーへんよ。 まだそーいうんは嫌やし、大体好きな人ウチ居るし」

「ん、あ、ああ、そーいやそうだったね。で、霞の好きな人って誰なんだよ、いい加減教えろって」

「……はあ、知らんわボケ」

ほんと、なんで一刀ってこないに鈍感なんやろか。

「え、俺なんか悪いことした？」

「うっさいばーか」

ちったあこんな反応しとるウチ見て脈あるんとちゃう？とか思ってもええやん普通。

「あの、何かゴメン？」

「疑問形で謝んなや。罰な罰、今夜は一刀布団無し」

「やめてくださいしんでしまいます」

「勝手に凍死でも何でもしてまえバカ」

しかしまあ、はあ……こない何遍もお泊りしとんのに、一向に手
え出されへんとか。

ウチやっぱ、一刀にとってはお友達でしかないんかなあ。

……って、ウチは何を考えるとるんや。

二章：二

／＼一刀

「なーあ、いい加減機嫌直してよ」

「知るかボケ」

何故か機嫌の悪い霞を相手に必死の交渉を続け早一時（約二時間）
とつくの昔に日が沈むどころかそろそろ日付が変わるんじゃない？
むしろ日付変わってます。

「マジであの、布団だけでも返して」

「いやや」

むう、と頬を膨らませて抗議する霞。

あ、やべ。ちょっと可愛い。こう、小動物系の可愛らしさが……。

「なんやじつと見て」

「いや。なんかむくれる霞も可愛いなーって」

「っい!？」

って、俺は一体何言ってるんだ？ 寒さで頭やられたかなあ。

霞もそんな嬉しくないだろうし。霞はカッコいい系でお姉さん系
だし。俺が勝手に決めただけだけど。

「って、どしたの霞？」

「な、なんでもあれへんわ!!」

「そ、そうっすか」

「せや、せやで！」

いきなり顔真っ赤にしやがって、変な奴め。
まあ。2人分の毛布と布団に一人でぬくぬくしてりゃあそうなる
わな。暑さ的な意味で。

「霞は真っ赤になる位熱いんだろー、俺に一枚返してよ。」

シャレになんないんだって。ギャグ補正とかそういうの無いから死ぬるんだって」

「っ、しゃーないな、特別やで！ト・ク・ベ・ツ！ ほれ！」

「……なにやってんの？」

何が特別なのか、霞はバツと手を広げて、蒲団を大きく開いて俺
を見つめてきた。

……どうしろと？

「特別やで特別！ ウチかて寒いんや、はよ、はよせえや！」

「いや、あの、毛布普通にくれれば……」

「あアん？」

「いえ、何でもないです……」

だから何が特別なんだと小一時間霞を問い詰めたい気分には駆られるけど、ぐっと飲み込んで。

もう一度コミュニケーションを図る俺。

平和憲法な日本男児だもの。話し合いで解決しなきゃね！

「あの、霞、えっ、俺、いったいどうすれば？」

「な、そない恥ずかしいコト言えるか」

えー。一体俺にどうしろってんだこの猫っ子」

「途中から思考口に出とるで」
「っ、まあそれは置いといて」
「じとー」

ジト目で睨まれた。
霞って口に出すタイプなのね。

「何が恥ずかしいんだよ。俺が寒さに悶える事がそんなに見苦しいのか？ この鬼、鬼畜！」
「いやいや、ウチそんなこと言うたらへんし。……ホンマに分からへんの？」

「うん」

「即答かい。この朴念仁」

「俺ほど空気の読める13歳は珍しいぞ？」

「勝手に言ってるばか」

「なんだよう。霞情緒不安定過ぎるぞー」

「な、誰のせいやおもっとんねん！」

「さあ？ あ、霞の想い人の所為だろ」

「あつとるけど間違つとるわあっ！！！！」

遂に切れた。

当りなのか外れなのかどっちだよ。

と尋ねようにも手当たり次第にモノ投げまくる霞にそんな事言えない訳で。

そして場所はせまい長屋な訳で。避けるスペースも余裕もそんなにない訳で。

「ちょ、ま、危なっうわっ！？」

「わ、こっち飛んでくんなーっ！」

見事机に躓き、そのまま俺は床に……あれ、何か柔らかい。

「いたた……むに？」

手のひらに当るのは柔らかな感触。

なにこれ手のひらに少し持て余す位のジャストフィット。むにむにやー。

「ひゃ、ちょお、やああ……かずとおつ、どこをひううっ!？」

霞は13歳だしおっぱいこんなに大きいわけがないし。

ラッキースケベなんて美味しいものが現実にある訳ないし。

大体俺が霞の乳揉んだらコンマ三秒で剣の錆びにされちゃうし。

……マジでなんだ？

でもこのむにむに、程良く柔らかくて。堅過ぎず柔らかすぎずで張りがあって。

むにむにむにむにむにむにむにむに……。

と、霞の顔を見上げれば、あるえ？　なんで霞さんそんな顔真っ

赤にしてるんですか。

あ、拳振りあげた。あれえ、世界がスローモーションで拳がぐぐっと近づい

「い、何時まで乳揉んどんじゃボケェ!!」

残像が見える拳速ってなんなんだろうね。

木戸を背中で突き破るのを感じながら、俺の意識は見事昇天した。

＊＊

／霞

「ごべんばはい」

折角の整つとる顔をめっちゃめっちゃに腫らして、一刀は土下座しとった。

まあ、腫らしたんも土下座させたんもウチなんやけどさ。

「つたく、一刀が男やし、気持ちが分からんでもないけどな。

ウチやで良かったけど、外で他の人にやったらそれこそ一生日の目を見れへくなるんやで？」

「はい……すみません」

「つたく、いきなり乳揉まれるとは思わんかったわ。……別に、一言あつてからなら揉んだってええのに……」

「ん、なんか言った？」

「はあ……なーんもいっとらんよー」

もう病気な段階いっとるんちゃうかって言う聞き逃しにも慣れてきたわ。

朴念仁ここに極まれり、や。

「……あの、霞さん？ その割にはなんで俺踏まれてるんでしょうか？」

「知らんわばか」

諦めとるけど、それと一緒に腹も立つ。

わざとやっとするんやないっぽいで許したつとるけど、ねえ。

ま、気長にウチも一刀と付き合ってくしかないんやろなあ。

え？ 見ててもどかしいから告白しちまえ？

かーっ、わかつとらんなあ。そ、そないなこと出来る訳ないやんけ！

やば、想像しただけで顔真っ赤なってもうたわ。だって、ウチから一刀になんて……きやーっ！

無理無理、めっちゃむり！ そんなんウチ死んでまう！

ウチが一刀に言うとか、想像しただけで……。

うん、なんやアリな氣いしてきた！

あ、でも……。

ウチが勝手に舞いあがつとるだけで、実際は一刀他に好きな人おったりしたら……。

それに女はおしとやかな方が受けるって言うし、ウチ見たいな男女やと……。

『ごめんあそばせ、ごきげんよう、文遠さん。ワタクシ、一刀さんの彼女を務めさせて頂いております彼女（仮）ですの』

『ゴメン霞。俺、関西弁嫌いなんだ。おしとやか最高、じゃすていす、俺の息子もおしとやかでサムズアップ！』

『という訳ですの。男女さんはお帰り下さいませ、おほほほほ』

って、なるかもしれんし……うう、なんや泣けてきた。

あ、でもでも！

『ごきげんよう、一刀さん』

『霞？ どうしたんだい其の髪型や喋り方は』

『ふふっ、一刀さんの好みに合わせましてよ？』

『ふおおっ、ゴメン霞、あの時あんなこと言って！ という訳でサヨナラだ彼女（仮）そして結婚しよう霞』

『ええ、喜んで、ふふっ』

みたいな展開で、ウチと一刀は無事結ばれて、えへへ……。えへ……。えへ……。えへ……。へへ、っなんや想像で寒気感じたで！？

それにしてもうふうふ笑うウチって気ツ持ち悪いわあ……。無し。無し。

しかもウチ喋り方変えるとマジで誰か分からんし。

あ、でも、一刀がその方が好みなら……。いやいやいや、でもやっぱ、いや、でも、いや、でも……。

一刻後

……あれ？　ウチ誰と話してたんや？

天か、天なんやね！？　……ま、ええわ。言った割に対しておもろなかったし。

さて、本題に戻って……。

あれ、そう言えば一刀は……？

「あのう、霞さんいや寧ろ霞様、百面相でも涎垂らすのでもなんでもやっても構わないんで

せめて上から下りてくれませんか？」

「ふえ、って、あ、ちよ、つま、え、ええっ！？」

わ、忘れとった。一刀踏んだままやった。
ん？　一刀を踏む……？

『足で踏まれて気持ちいいん?』

『っ、くうつ、はい……』

『あは、変態やなあ一刀は♪』

『で、でも霞が』

『あつれえ、霞って今呼んだん?』

『くつ、ご、ご主人様が……』

『エライわあ。よう言えたね、ご主人様からご褒美や』

『つくあ!?!? それ、ちょ、ヤバいつ』

『あははっ。ホンマに変態さんやなあ一刀お、あははは』

……うん。アリやね!

一刀にご主人様って言われるんも中々やし……。

むしろもうちょっと犬っぽかったら益々……じゅるり。

「あの、霞さん? なんだか不穏な空気を感じるのですが……」

「はっ!?!? ……コホン。えーっと、一刀、怒らんで正直に答え
てな? 何時から見とったん……?」

「知るかボケ」

「あアん!?!? なんやケンカうつとるんかい!」

「いや違うからストップストップ手に持った土鍋を置きなさいそ
れで殴られたら余裕でオーバーキルだから!

霞と布団を得るための交渉してた辺りからって意味だから痛い
痛い痛いやめてまだ死にたくないし死因が箸で刺されたとか先祖に
顔向けできない」

「ああ、なるほどな……って、それめっちゃ最初やんけ!」

シュ、って風を切るええ音がしたときにやもう手遅れで。

あ、やっちゃった。って表情を浮かべとるであろうウチの咄嗟の制止も虚しゅう、一刀の腹に……。

「ゴフウっ!？ 怒らない、って、い、言ったのに……」

「べ、別に怒っとらへんやん、殴っただけで。 って、一刀？

おーい、一刀お？」

「へへ、良いパンチだぜ。お、俺さ……無事に朝日を拝めたら、結婚するんだ……がくっ」

「ちょ、変なフラグ立てて逝くなやーっ!!?」

＊＊

「なんだよ、一緒に布団使えってコトなら、普通にそう言えば良いじゃん」

「……うっさいわ」

ウチがせっかく意を決して一刀に言うのと、拍子抜けするくらいあっさりウチと一緒にの布団に入ってきた。

決意返せやバカ。

「……」

「……おーい？」

にしても一刀平常運転過ぎやろ……。ウチがこないドキドキしてるんが馬鹿みたいや。

こんなに近いんに、こんなに一刀の匂いする場所でウチが平静で居れるわけないのに、一刀はそないなことどこ吹く風って感じや。

ちったあ紅くなってくれたり、ドキマキしてくれたりしてもええ

やん……。

やっぱ、一刀的にウチって女の子の内に入らんのかなあ……。

「……」

「……霞さん」

気の置けない奴、って風に見られとんのはそんだけ信用されとる証やで、ウチとしては嬉しいんやけど。

でも、それが友情どまりやと、ウチ的に、ちよつと辛いわなあ……。

好きな人が自分に心開いてくれとるのに、それ以上仲良うは絶対成れん。

どんだけ生殺しやっちゅう話やで、全く。

うはあ……なんやまたへこんできた。

「はあああ……」

「……ええー、俺の所為なのか？」

ん、そーいやウチって、何時の間に一刀んこと好きになっとったんやろか？

会って、怒られて、ウチが謝って……アレ？

いつの間にやろか？ やっぱ文章にして無い間にやろか？

……ん？ 文章ってなんやねん。

ともかく、まとめてみよか。

初めて会って、早速怒られて。……あれ？ ここで終わっとるのと無い？

いやいや……おちつけウチ。続きや続き。どっかにウチの気持ち

の謎が隠されとる筈や。

んでなんやかんやウチが行動して、真名を交換してもらて。

ノリと勢いと一刀が拒まんのええことにたかりつつ一緒に遊んで……。

今に至つとるね。

うーん……たかつとる辺で好きやったんは間違いないし。

てか出会いがしらで怒鳴られてもおっかけた辺りウチ、もしかして一目惚れやったんか？

……うーん。やっぱ分からへんわあ……。

にしても、コレやと、ウチが勝手に好きんなるコトはあってもや。一刀がウチんこと好きになってくれる可能性って皆無とちゃうか……？

せやよな、しょっぱなの第一印象は最悪やし、真名もなんや妙なトコで世間知らずな一刀に無理やり突きとおした感が否めへんし。今かて一刀に言われとらんってだけで好き勝手しとるだけやし。てか内心鬱陶しがられとつても変やないし。

……あかんわ、コレどう考えてもウチ希望無しやん。

「しーあーさーんー、許してよう」

「……ぐすっ」

「!？」

いかん、涙でてまう。

泣いたらアカン、一刀が横に居るんに……、ってそやんけ！

真横に本人居るやんけ!! う、ウチ一体何考えとんねんっ!？

「か、かか一刀っ……って、アンタなにやつとるんよ?」

「許して下さい霞さんむしろ霞様」
「？」

なんで一刀土下座しとんねんなか？

もしかして……ウチ、一刀にまたなんかしてもうたんか？ 無意識の内に、気付かんうちにまた殴ってまっとなったとか？

今のぼーっと物思いに耽とる間に？ こんな土下座される位に？

したら、益々嫌われてまうんかなあ……？

「ぐすっ……えぐっ……」

「ええっ！？ し、霞様マジで許して下さい本当ごめんなさい」

うううつ、また一刀に謝られた……。

ウチマジで何やらかしてんねんっ！！

「ううつ、うえええんっ、ぐすっ、うえ、ひぐっ……」

「……oh, 俺はどうすればいいんだってばよ」

二章：三

／一刀

やたら情緒不安定な霞を色々ギリギリストライク気味な無茶振りを受けてたりしてなんとか宥め寝かせると、俺はようやくと床に着いた。

とつくに日付は云々どころか、余裕で朝日昇りかけちゃってます。

「しかし、霞は一体どうしたんだろうな」

「……んんう」

俺の生活を劇的ビフォーアフターした張本人のデコをうりうりと指で押す。

あ、ちよっただけ寝苦しそうな顔になった。

思い出せば、霞という存在は何時の間にか俺に食いこんで、順調にプライバシーとか生活圈とかを占領していった輩だ。

この世に記憶を受け継いで（と俺は思っている）生まれた身の俺は、そんな交わりを13年間せずに生きてきた筈だったのに。

また、親しいと世間一般の主観でそう言える人たちとも、一線を越えることは無かったのに。

この霞、もとい張遼文遠は何食わぬ顔で俺の中へ入り込んできた。それは生活圈を土足で辺り構わず犯される様な感覚では無く、何か温かいモノが包み込んでくるような感覚で。

「……初めて、だよなあ」

思えば改めて生を受けて13年。

俺は早々と世界に勝手に絶望して、早々と交わりを拒み断つてきた。

よくよく考えれば、いくらなんでも畳4畳半の世界で全てに絶望するなんてそれなんて井の中の蛙ⅠⅤ，100。

……なんか井の中のryってカッコいいな。

もしかすれば、俺は前の分の記憶補正も含め早熟厨二病だったのかもしれない。

誰も俺を分かってくれない。ってのは中二のテンプレだし。

でも、俺はどうあれ人間嫌いには遅かれ早かれなっていたと思う。未来の日本のような綺麗事だけを並べたてる似非善人も居ないが、代わりに慈愛やら慈悲やら無差別の愛とかそういうものも無い。

親でさえ喰うか食われるかだ。逆に人間不信にならない奴は居るのかと小一時間問い詰めた。

実際、会う奴会う奴どう食ってやろうか考えてる様な連中ばかりだし、打算的じゃない人間なんていないし。

俺も例に漏れず打算的に近づき、何人かを己の糧にして喰っちゃまってるし。

でも、そんなシビアな損得感を抜きに接することが出来る人間に、俺は出会えた。

このむにゃむにゃと幸せそうに睡眠を貪る彼女は、俺が張った壁をなんなくスルーしていつの間にか溶け込んだ。

俺も霞相手には損得感云々よりも、この人にどうすれば喜んでもらえるのか、どうすればもっと親しくなれるのか、それが先に出てくる。

それは、とても貴重でとてもうれしいコトなんじゃないかと思う。ある種の、殺伐とした中にある清涼剤の様な。

そんな唯一無二の“親友”。

……親友？

そう言えば、俺にとって、霞とはなんなんだろうか。その逆も然り、霞にとって俺とはなんなんだろうか。

俺にとっての霞、と問われ真っ先に思いつくのは、やはり親友。リアル僕は友達が少ないどころか僕は友達は何もない俺にとっての、初めての友人。

でも……本当にそれだけか、なんて問われると、俺は間違いなく即答できない。

大体だ、前世は年齢Ⅱ彼女いない歴な俺が、こんな可愛い女の子と半身の様に親しく付き合ってた憧れや妄想を抱かない訳がない。こちら童貞だよなんか文句あんのかコラ。

でも、俺の想いが叶うことで俺は幸せになれるだろうけど、イコールで霞の幸せには結び付かない。

今こそ普通に霞と時間を共有しているものの。俺と霞は根本から相交われない、超えられない壁がある。

俺は唯の貧民の孤児で、霞は一地方を治める豪族のお姫様。

住む世界も感性も価値観も何もかもが異なる組み合わせなんだ。だから俺と霞は最初に衝突した訳だし。

今は霞の気まぐれで、俺はこの子の傍に居られるけども。それが霞の幸福につながるかといえど否としか答えられない。何も持たないガキな俺が、愛だけで愛しい人を幸せに出来る訳が

ない。

ここは、ドラマや映画とは違う、現実なんだ。

駆け落ちしたところで、街から子供二人が放り出されれば待つるのは追剥ぎか獣か。

大体、霞がその提案を受け入れてくれるともあまり思えない。

霞には想い人がいて、俺は彼女の親友でしかなくて。

どちらが彼女にとって大切かは俺は分からないけど、この子は優し過ぎるから、俺が怒鳴っただけで全ての人間に同情しちゃうほど底抜けに優しいから。

何となくだけど、着いてきてくる気も多少はする。

でもそれは like であって love じゃない。そんなのは霞にとって不幸でしかない。

「んみゅう……かずとお……」

ふと眼をやれば、完全にリラックスした寝顔。

信頼されているのをひしひしと感じる。

なのに俺ときたら、あまりにも無防備なそれに邪な感情が芽生えて……。

いかんいかん。霞の信頼を裏切るとか最低だ。

霞の気持ちは分からないけど、少なくとも俺はこの子の居場所になれている。

この寝顔が何よりの証で、それだけでも十分幸せなコトだ。それを、壊してしまうことは真名の誓いへの背信りで、親友への裏切りだ。

ああ、やっぱ俺霞んこと好きだわ。首ったけだ。

俺の想いは到底叶わないだろうけども……。

願わくば、君の笑顔がずっと守られますように。

＊＊

朝日が窓の隙間から漏れ、薄暗い部屋を淡く照らしている。
遠いところで鶏の鳴き声が聞こえて、それを合図にしたみたいに、
霞の瞼がゆっくりと開いた。

「おはよ」

「ん、にゅ……おはよ……っ、かかか一刀っ!？」

「うん俺だよ。どうかしたの？」

「ついやいやいやどうもせえへんで!？」

べ、別に朝から一刀ん顔が目の前にあってちよっと吃驚したけど嬉しかったとかそんなちやうで!？」

おう、平常運転だね。んじゃ始めるか、霞の無茶振りその一。

「ん、今日も元気そうじゃん。んじゃ、今日は如何なさいますかお嬢様？」

「っっ!？ いいいきなりなにや、っう、舌噛んだ……」

「大丈夫でございますかお嬢様、傷の具合はどうでしょうか？
治療が必要なら今すぐにでもご用命くださいませ」

「別にこんなんどうってことあらへんわ！ そ、それよりもその喋り方はなんなんやっ!？」

「……お気に、召さないでしょうか？」

「いやそんなことはあらへんで！？　むしろなんか新しい領域に目覚めそうच्छゅーか、むしろバッチコイって感じやけど、ってなに言わすんじゃ！」

「流石お嬢様、頼まれても居りませんのにノリ突っ込みとは」

「それ褒めて無いやろ！？」

「その通りでございます」

「殴ってええか？」

「いきなり普通のテンションになられると私、聊か困ってしまいます」

おお、霞が困ってる困ってる。珍しいモノが見れた。

さて、このやたらと丁寧口調な俺だが、これこそ霞の無茶振りその一。

『……一刀が、前言った“ひつじ”んなってウチに優しくして欲しい』

涙目上目づかい頬赤らめてちらっと俺の顔を窺う霞さんに頼まれて、正直きゅんきゅんしました。

しかも内容が優しくして欲しい、なんて言われた日には、ねえ？　しかし俺、好意を自覚したら何となくふっきれた気がする。綺麗な一刀のタグ外さないで！

という訳で、俺は一日執事になった。

ひつじってのは、霞にこの執事の話をしたのが結構前だから覚え間違いしてたそうさ。

「あ、もしかしてアレなん？ 昨夜のウチの無茶振り」

「無茶振り、と自覚がありつつ依頼するお嬢様の意地悪さに私感動してしまいました」

「良し殴る、ゼツタイ殴る、無駄無駄言いながら殴ったる」

「やめてください しんでしみます」

＊＊

「んで、それいつまで続けんねん」

「え、一日中ですけど」

何言ってるんだこの霞。

「そのなんや可笑しなコトほざく奴見る目止めや」

「滅相ありません」

「はあ……そりゃうれしいけども、なんや納得いかんわあ。じゃあ、今日はひつじな一刀と一緒に何すればええん？」

「それはもちろん、次の無茶、コホン。お嬢様の依頼に従って行動させて頂きます」

「」

あ、固まった。まあひつじさんも含め相当恥ずかしいコトばっか言ってたしねえ。

「因みに依頼は108式までございます」

「嘘やっ！」

「はい、嘘です。昨夜お嬢様は5つ無茶振りを成されましたので、其れに従って行動させていただく所存でございます」

「……一刀、アンタ実はウチおちよくって玩具にしとるんとかやう？」

「そんな事ありませんよ」

「目え見てその台詞もつかい言ってみろや」

「ソナコトアリマセンヨ」

「カタコトなっとなるやんけ！」

関西弁だと突っ込みが上手くなるのかしらね？

まあいいや。それにしてもなんで霞の言葉って関西弁に聞こえるんだろうか？

「ではお嬢様、次の無茶ふ……依頼に行かせて頂きます」

「もう無茶振りでええよ」

「いえいえ、そう言う訳にも行きませんので。」

次の無ち、依頼は……

『ウチ、一刀ん手料理たべたい』でございます」

「な、ななっ、ウチそない恥ずかしいコト言うたん！？」

おおっ、これもまた珍しい反応。なんか霞って弄り甲斐があんなあ。

「その通りでございます」

「たんまやたんま！ そない恥ずかしいんは無し無し！ ウチ無理やてっ！」

「いえ、お嬢様の無茶依頼は絶対でございますので」

「それってウチが絶対なん？」

「無茶振りが絶対です」

「……」

ジト目で睨まれてしまった。スルーするけど。

「という訳でお嬢様、少々ご足労願えますか？」

「ええけど、何処行くん？」

「とりあえず市場までよろしくお願い致します」

「ういうい」

とオマケ
少女移動中

「着きましたねお嬢様」

「なんや一瞬で着いた氣いするんやけど」

「氣のせいです」

「え、でも」

「氣の所為でございます」

「あ、はい……」

そこは触れちゃいけないところだ、媒体的にもメタ的にも。

「さて、では今回の品目ですが、“おうどん”でございます」

「おうどん、って一刀が前言った拉麺の親戚みたいなもんやろ？」

「その通りでございます。ただ、使う材料が聊か異なっておりますので……」

あ、おっちゃん、この粉少し手に取っていい？」

麺類の話をしてた所為か、少し身を乗り出し気味で様子をうかがっていたっぽい

露店のおっちゃんに話かけると、待ってましたと言わんばかりに身を乗り出してきた。

「おうよ、でも坊主、ソレちよつとしつとり気味だぜ？」

「じゃあこっちは？」

「それはしつかりしてるぞ。聞いたところ麺料理作るんだろ？
ならこっちだぞ」

「うーん、しつとりしちやってるんだよね。てことは売れ残りそうなんでしょ？」

「だな。袋で買うと大体一つ二つは交じってんだよ」

苦虫をかみつぶしたような顔だ。

まあ入荷すると不良品が絶対混じってるってのは頂けないよなあ。

「大変だねえ。あ、一斤(約500g)いくら？」

「そだな、八銭(約240円)でどうだ？」

「んじゃさ、二斤買うから十二銭でどう？」

「坊主おれに首括れていってんのかい？ 十五銭」

「まさか！ それに売れ残る位なら売っちゃまった方が良いじゃん、十三銭」

「駄目だ、俺にや嫁も子もいるんでね、十四銭」

「ん、じゃあこの辺で妥協かな、はい十四銭」

「てめ、最初っからそこ狙ってやがったな。がはは、一本取られ
たぜ」

口調だけ怒って見せても、おっちゃんの表情は明るめだ。

やっぱ美味しい客だよな、わざわざ不良品買ってってくれるんだし。

「まあいいじゃん、ありがとねー」

「おう、坊主も嫁さん大切にな」

「嫁？」

嫁、嫁って、嫁？

はて、俺に嫁なんていたかしら。どっちかと言えば妖精さんルートだと思うんだが……。

おっちゃんに視線を送ると、後ろをくいくい顎で指す。

振り向けば……、えっと、霞さん？　なんでそんなに真っ赤になってるんですか？

いや、正直眼福余裕で今日も飯が旨い状態なんですけどね……あ、まさか……。

自分が妙に緊張しているのが解る。

変にカクカクしながらおっちゃんの方に向き直れば、イイ笑顔でサムズアップ。

「……っ、な、なな何言ってるんだおっさん!？」

「がはは、若い、若いな坊主!」

「俺と霞はそんな関係じ」「ば、バカ言うなや!　ウチと一刀はそんなんちゃうわ!!」

「お、おう……そうか」

突然の霞の乱入に、おっちゃん苦笑い。俺涙目。

いや、分かってるけどね?　そんな目の前で叫ばれると俺のガラスハートはボロボロになっちゃうわけで。

「坊主、元気出せよ……」

気付いたらしいおっちゃんに、ほんと手渡されたのは一枚のハンカチ。

くう、優しさが身にしみるぜ……。

「あ、それ二銭な」

……世知辛えよう、この世の中。

二章：四

＊＊

「……んじゃ、はじめよつかあ……はあ」

「いつまで引き摺っとんねん」

「では、始めさせて頂きます」

「切り替え早っ!？」

「執事ですので」

まあ、あまりうじうじしてて霞に嫌な思いさせたら本末転倒もい
いとこだしな。

ちょっと傷ついたけど。ちょっとだけどね! ほんの少しだけだ
けどね!!

……ううっ。

「いきなり泣きだすなや」

「世知辛いんだよ! ううっ……」

分かっててもショックなんだよ思春期なめんな。

「……よし、ふっきた! ……多分」

「ったく、何でないとるんか知らんけどあんまみっともない一刀、
ウチ見たないで？」

「お、おう……」

やべえ、なんか照れる。

「こほん。じゃ気分入れ替えて。ではお嬢様、おうどん講座

を始めさせて頂きます」

「わーわー、ぱちぱちー」

「ではコレを読んでください」

「えーと、何々？」

準備するもの（3〜4人前分位）

・中力粉 500 g

・塩 15 g

・水 130 g

・打ち粉（薄力粉でOK） 適量

……なあ一刀、このぐらむってのなんなん？」

「分かりやすくするためのお約束でございます」

「えっと？ つまりどゆこと？」

「気にしたら負け、でございます」。

では続きを」

「なんや釈然とせえへんけど……まええか。

“はじめに中力粉をふるいにかけて、そこに十分に溶かした塩水を小麦粉の中央部にくぼみを作って2／3くらい入れます。

ほい、入れたで。

んで、次は……。

塩水は生地の下に広がりますので、少しずつ手で粉を混ぜていきます。”

ん、思ったより粘っこくないんやな」

「そうそう、お上手です。その調子ですよ、お嬢様」

「えへへ、そう？ って一刀、なにやっとなるん？」

「足を綺麗に洗っております。これから必要なので」

「足？ 足をなんに使うん？」

「それは後のお楽しみです」

「ふーん……？ あ、次はどないすればええんや？」

「次に小麦粉と塩水をよくなじませます。

粉っぽいところに塩水を入れ円を描くように混ぜたり、かきあげるように混ぜたり、

小麦粉一粒まで塩水が行き渡るように攪拌してください」

「ういういー」

（少女攪拌中）

「二刀一刀！ ど、どないしょ！ 粉がエライことなってもうた！」

二、三分すると霞の叫び声が聞こえた。
見てみると……

「なんだ、カタマリ出来ただけじゃん」

「素が出とるで素が」

「おっと……こほん、ご心配は要りませんよお嬢様。

しばらくすると水の多いところは固まりに、少ないところは粉のままの状態になってしまうものです。

そうしたら、固まりをちぎったり砕いたりしながら粉の部分と混ぜ合わせてください。

塩水が均一に回ると小麦粉が白色から淡黄色に変化しますので粉っぽさが取れないようでしたらほんの少しずつ手水を加えて様子を見ます。

全体的にそぼろ状になったら声をお掛け下さいませ」

まあ確かに怖いよなあ。あのカタマリってどう見てもうまく言ってる様には見えないし。

「なんや、ウチ失敗したんやなかったんか……ほっ」

「ご安心ください、今のところは……」

「なんや含みのある言い方やな」

「気を抜くな、ってことです」

「おお、なるほど」

＊＊

「うっしゃ、できたで！」

「お疲れ様です。では次の行程に入りましょう。

まず十分に水を行き渡らせたら、少しずつまとめていきます。

コツは一気に固まりにしないで少しずつ寄せていく気持ちでまとめてください」

「うい了解」

「ぼそぼそした感じでなんら問題ありません。纏まっていればいいのです」

「これでええの？」

おお、ものの見事にぼそぼそ感が出てる。

「はい。では次の行程です。お嬢様、その生地を席むしろの上に置いてください」

「え、でもコレ食べモンやろ？」

「蓆は一応お酒で殺菌してあります。あとうどんもどうせ煮ますし」

「ええー……腹痛くなったりとかないよな？」

「もちろん。心配ありませんよ、多分」

アルコールキツイって言っても精々4，50%だしねえ。
99%の薬局で売ってる奴みたいな訳にはいかないだろうけど、
昔から日本でやってるし、問題ないよね。

「多分て……毒見は一刀やで？」

「お嬢様より先に従者たる私が箸をつけるだなんてとんでもない
！」

「……」

またジト目で睨まれてしまった。
でも気にしない。

「では、ひいてもらった生地……」

「え、ちょ、何するんや……！」

「これは足ふみ行程でございます。」

これはうどんのコシを出す大事な行程なのです。

人がのつても破けないビニール、と言いたい所ですが、流石に
ビニールは無いので割愛です。

ゴザをのせて足ふみます。重心をかかとからつま先に、つま
先からかかに移しながらまんべんなく踏んでいくのです」

「これホント食べて大丈夫なん？」

「心配ご無用です。昔からこの方法です」

「ホンマやろなー？　へんなドッキリとかやったらシバくで？」

少年生地踏中

「……なー、いつまで踏んどるんよー？」

「これはうどんにコシを出すために重要なのです、お嬢様。

因みに私、コシのあるのが好きなので大体半刻より短い位（大体5分、200回）を目安にしております」

「長っ！ そんな踏みまくって生地大丈夫なん？」

「乱暴に踏んで、せっかくの密度を切れさせたりしなければ無問題です」

「へえ、生地って丈夫なんやなあ」

「199……200っつと。そして終了したので、生地を軽く巻いて、両端の口元を閉じます」

「これで終わりなん？」

ちょっと期待した感じで霞が聞いてきた。
でも残念ながらまだ終わらないんだよね。

「いえ、これから2回目の足ふみです。外側、内側とまんべんなく踏み込んで横長の四角い形状になるようにします。

踏み込み目安はさっきと同様です（200回以上の踏み込み）。

「めっちゃ踏むんやなあ……」

「因みに500g増える度に足ふみのセットを増やすと良いと思います」

「誰にソレ話しとるん？」

「聞いちゃ駄目ですよ、お嬢様」

ネタ的にも、メタ的にも。

＊＊

「200っつと、ふう」

「終わった？ 終わったん？」

「いえ、まだ後2回ございます」

「ええ……ウチお腹空いてきたんやけど」

「まだまだ辛抱ですよ、お嬢様。」

では3度目の足ふみに……（以下略）終わりました」

「なんやろ、いまなんか“大いなる力”的な何かを感じたで」

「三分クッキングと一緒にですね」

まあ、こっちはあらかじめ完成品を云々してないけど。

「なんぞその“くつきんぐ”って？」

「おっと、私とした事が。ご覧下さいお嬢様、生地が赤ちゃんの肌のようにつるつるになってますよ」

「おお、めっちゃすべすべや！」

「では次は菊もみの行程でございます」

「きくもみ？」

「菊もみは生地の中にたまった空気を抜く工程です。」

まず右手の親指で生地をぐっと押して、生地の中心へ中心へ練りこむように心がけてください。

左手は手のひら掌低部分で右手の動きに合わせて生地を寄せるようにするとうまくいきます。

終了の目安としては生地がつるつるになるまででございます」

「なるほどなー、菊っぽい模様が出来るで菊もみなんやね」

「その通りでございます。では次はへそ出しです。」

菊模様になった部分を寄せていってへそを作ります。

掌底部分をうまく使って鉢の底にころころ転がすようにしながら、円錐状の形に整えます。

円錐状にしたらへその部分を上にして軽くつぶし、反対側も同様に軽くつぶします」

「終わりなん？ これで全部すんだんやね！」

「ここで半時（一時間）ほど寝かします。乾かないように器に入

れて濡れ布を掛けておくといいでしょう」

「なるほど半時寝かすんかー、ってなんやとお！？ 半時、半時
もまたなアカンの！？」

「その通りでございます」

「いーやーやー！ ウチおなかへったー！！」

「……」

しかし駄々こねる霞も可愛いなあ……。
なんかほっこりしたぞ。

「その子供を見守る父親の温かい視線止めや」

「……」

「ん？」

なでなで。

「うがー！ 頭撫でんな！！」

なにこれかわいい。

> p f <

＊＊

「いひゃひゃひゃ！ もうらめえ！ かた揉みゆのひやめてえ！！」

「つと、丁度半時経ちましたね」

「……はあ……はあ……ウチ、穢されてもうた……よよよ」

「アホやってないでくださいお嬢様」

「ぶーぶー、ノリ悪いのはいかんでー」

霞の抗議は置いて。

「では最後の足ふみです。厚さが五分（約1？）程度になるように踏み込みます」

「って無視かい！」

「もう慣れたものですよ、はい踏み終わりました」

「おお、一刀が“大いなる力”的なモンを使いこなしたる」

「では最後の行程、延ばして切りましょう」

「ほーい、やっとウチの出番やね」

「まず打ち粉をよく敷きます。十分な打ち粉は乾燥を防いでくれますから（重要）」

「うーい、ぱっぱっぱ、っと」

次は麺棒を中心から軽く押しながら転がします。

生地を90度ずつ回転させて繰り返し延ばし最終的にひし形の形にしてください。

といっても気合入れ過ぎて破ったりしなければ、最初の頃はひびつな形でも構いません。

延ばす時は打ち粉を十分に付けて、隙間が出来ないように麺棒に巻き付けてください。

前方に転がしてはかるくのし板に押し付けるように引きつけ生地を延ばしていきましょう」

「うーん、意外と難しいんやね」

「あと生地がしっかりしてるので、体重を掛けて延ばしてくださいね。」

厚さが一分から二分（3，4mm前後）になればこの行程は終わりです」

霞の生地はちょっと歪だ。まあ俺も大差ないんだけどさ。

「ではいよいよ最後の行程です。生地をたたんで一分から二分の

同じ幅で切りましょう。

折り目の部分がくっ付きやすいので打ち粉もしっかり振りましょう」

「よっしゃ、刃物は任せてや！　うりやりやりやりやりや！」

「はい、これで“麺”は完成です！」

「うりやりやりや、え？　麺は、麺はってどういうことやねん！」

「お嬢様、麺だけ食べるつもりだったのですか？　これだとまさに素材そのままこむぎあじですよ？」

「……そりやないでとつつあん」

「やれやれ、仕方ないですね……」

そういうと思ってつゆは先に用意しておきました。ではこちらをご覧ください」

「おおっ、えらいええ匂いやなあ！」

「因みに材料は、

水　2リットル　市販のものかできれば浄水器を通したもの

利尻昆布　（もしくは羅臼昆布など）10センチ角1枚

厚削り鰹節、もしくは混合節100グラム、花鰹なら50グラム

煮干　20匹程度

薄口醤油　200cc　（または、だし醤油）

塩少々　です。

今回はあらかじめ昆布を水に数時間つけるなどして用意してあります。

メインは鰹、煮干しと昆布はサブなのでご注意ください。あとの詳しい作り方はググってください。

また、面倒な場合は普通に市販の鰹だし系のつゆでも構いません」

「だから誰に話しかけるとるんよ？」

気にしない、気にしたら負けなんだよ、霞。
と視線で諭したら、霞もこくりと頷いてくれた。本能的に触れちゃいけない部分って分かったんだと思う。

＊＊

「では最後、湯での行程です」

「おおっ、これでやっと食べられんやね！」

「ええ、お嬢様。」

先ず一言、うどんの湯ではとても重要です。けっして即席めんをゆでる様な感覚でお湯にぶっこんだりはしないでくださいね、お嬢様」

「え、ぶっこんでコトコトすりゃええんとちゃうの！？」

「当たり前です。まず家庭にある一番大きなお鍋に水をたくさん入れ沸騰させてください」

「ほい、沸騰しとるで」

「次に麺がくっつかないようにパラパラとほぐしながら湯の中に入れます。」

くれぐれも丁寧に入れてくださいね」

「そーっと、そーっと」

「はい、では竹箸で8の字を描くように麺をほぐします。」

いったん冷めますんで麺はその方に沈みますが、沸騰するとまた浮かんできますので湯の中できくるくる回るくらいの弱火にします」

「火加減は頼んだでー」

「お任せください。ゆで時間は一刻（15分）くらいです。」

因みに麺の太さや好み、ざるで食べるのか、かけにするのかで

違いますんで気をつけてくださいね」

1，2本取りゆであがりを確認してください。

ゆであがりの目安としては1，2本食べてみて大丈夫なら確かでしょう」

少年&少女待機中

「そろそろ時間ですね、お嬢様、ご確認して頂けますか？」

「はむ……ん、ばっちりやで」

「では茹で上がった麺は水にさらして、両手で麺を軽くこするよううにして表面のぬめりを取ってあげます」

「さーっと……」

「……っ、はい！ これで完成です！ あとはもりつけて食べましょう」

「おおっ、苦労の末やっとできたんやな！ いやあ、マジでウチ腹減ったわ」

「お疲れさまでした、では頂きましょうか」

「うんっ！ よっしゃ、喰うで！」

霞めっちゃ嬉しそう……。

作ったかいがあるってもんだ。

「では……」

『いただきまーっす！』

＊＊

「むにゃ……」

深夜。一日霞と遊びまくって、ふざけ合って。そんな楽しかった日も、もう終わりに近付いている。

「うどん、喜んでくれてよかったよ……」

温まれて、お腹も膨れてで霞にも大好評だった。麺いっぱい作ってたのに、霞は全部食べちゃったし。

そんな彼女は、今日も幸せそうな寝顔で眠っている。ついさっきまでは片づけをする俺に堪えず声をかけたり茶々入れたりしてたんだけど、気付いたら眠っていた。

なんだかんだで遊び疲れてたのかな？俺もなれない丁寧な言葉でちょっと疲れ気味だったりもするけど。

因みに、霞の残りの三つのお願いは、一つ、『ウチにあらん、って食べさせて』

コレは言った時にもう半狂乱だったせいで霞は覚えていなかった。なんとか実行できたものの、互いに照れ過ぎて凄い気まずい目に会ってしまったし。

二つ、『肩揉んで』

どうしてコレ出たし。って突っ込みが霞から出たが、それは俺も聞きたい。

多分凝ってたんだろう、うん。

なんにしても俺としては突然振って沸いたボーナスタイムだったんで生地寝かせてる間に誠心誠意やらせて頂きました。

三つ目は……。

と、今日一日過ごしてみて、多分だが俺は霞に好かれている、って思った。

自惚れとかじゃなくて、あのある意味酔った勢いに言っちゃった感さえあるあの数々の無茶振りも、

友達同士、って壁から一步超えた様なお願いばかりだったのに霞は全部やらせてくれたし。

（正直、友達同士ってだけの関係なら断られたり嫌がられたりするだろうと俺自身想ってた）

かなり近い距離間だったのに、嫌がられもしなかったどころか所々照れてさえた。

テンプレな鈍感主人公なら、友情の延長線上、とかほざくんだらうけど、俺は普通の男子高校生だ。

こんだけ露骨なら普通は気付く。

てかあり得ない位近づき合ってるのに、何も思わないとか確実に精神病か認識障害だろうと。

でも、やっぱり俺には踏み出せない。

確実に、その選択は不幸になるから。

ここは、現実なんだ。

綺麗な物語の世界でも、理想郷でもなんでもない。

汚い人間が闊歩して、日夜人知れず誰かが暗躍して殺し合う世なんだ。

華やかな世界の住人と、汚い世界のどぶ鼠。

釣り合わないし、華やかな世界の幸せから霞を引きずり落としてしまおう。

それに……。

俺は届けられた竹簡をもう一度眺めた。

『仕事を始めろ』

簡潔なこの文章、でもそれは俺と霞の違いをきっちり仕分ける証明書。

薄汚い犯罪者と煌びやかなお姫様。

そして、俺は霞の父親を殺しに掛かるんだ。
もちろん即物的な殺しじゃないが、それでも精神は確実に死んでしまおう。

親の敵と、標的の娘。

交流がある事さえ本来は許されないのに。

俺は、霞の気持ちに甘えてるだけだ。

だから、三つ目……。

俺は、キミの前から消えなければならぬ。
キミの幸せを願って……。

ごめんよ霞、最後のお願ひ、叶えらんないや。

「お慕い、申し上げております……お嬢様」

自分の想いを、芝居がかった台詞と身振りで誤魔化する。
家から飛び出すと、外は、雪が降っていた。

二章：五

／一刀

「高、参りました」

「遅刻だ」

俺を表す文字は姓しかない。

故に高。高家の生まれでそれ以上でもそれ以下でもない証。そして俺にとっての忌まわしい過去の一幕の証拠でもある。

それを名乗れば、板戸越しに聞こえる声。

俺の上司だ。この時代にしちゃ出来過ぎた管理体制と規律で、急速に勢力を伸ばした新興黒社会。

そして俺は、そこに雇われた鉄砲玉の一つ。

「申し訳、ございません……」

「まあいい。それよりもだ。お別れは済んだのか？」

思わず、汚い言葉が口から飛び出そうになる。

だれの所為だ。お前の所為で俺は。

それを無理やり飲み込み、従順な台詞を捻りだす。

「はい、滞りなく」

「良し。では行け。手続きは済んでいる。お前は今冬季新規採用枠で採用された補佐官の高北郷だ。」

并州牧張越様の直属補佐官丁苞様の補佐官だ。姓は高、名は順、字は北郷。間違いないな？」

……驚いた。まさか名前まで作られているとは。

字と名は親から貰ってなかったから今までなかったんだけど。

まあ、この名前の為に何処かの高さんが消えたんだろうか、それとも既にパイプがあるのか。

……どちらともだろう。

上司は確実に石橋をたたいて渡るタイプだし。

「はい、私は高北郷。并州牧張越様の直属補佐官丁苞様の補佐を務めさせて頂いております」

「良し。期限は」

「これより二月^{ふたつき}までの間に」

「良し。行け」

「御意」

薄汚れた一寸先さえ見えない道と、華やかな約束された将来の道。ここが分かれ道。

さよなら、霞。

＊＊

配属先に、真新しい文官服を着こんでゆく。

正規の衣装だから、だれも咎めもしない。俺はどこからどうみても新規採用された文官だろう。

「失礼します」

「おや、来たかね。ふむ、キミが新しい補佐の人かね？」

「はいっ！ 高北郷と言います！ よろしく願います」

出迎えたのは如何にもな好々爺といった風貌の男性文官だった。
彼が丁苞か……。

「ほっほ、若いのはいいのう、元氣があり余っとるなあ」

「いえいえ、自分の様な若輩では丁苞様には敵いません。四十と数年にわたって現役でいらっしゃる貴方様にはとてもとても」

「おや、そこまで知られて居るとは」

「自分の目標は貴方様のような立派な文官になることなんです！
自分の心の師とも言える貴方様の元へ配属されたことをとてもうれしく思ってます」

「おやおや、それは嬉しいのう。いっちょ期待にこたえられる様
頑張ってみるかの」

性格は自尊心が高く、頑固。

また融通が効かないが、忠誠心は折り紙つき。なんと霞の父の教育係をやっていたらしい。

州牧の教育係に付けられる、それがこの男の州牧からの信頼度が何より現れている一面だろう。

しかしなるほど、これが霞曰く“頭堅いクソ爺”か。

確かに懷古主義っぽいし、融通利かなさそう。

でも褒めればそれなりに扱いやすそうだし、誘導もしやすそうだ。

……まずはこの人からか。

心の中で、私欲の犠牲者になるこの男に小さく謝罪すると

俺は、俺の中に“俺”を創る。

俺は役者にはなれない。ならば、演技ではなく真実にすればいいのだ。

俺は、人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年だ。
俺は、人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年だ。
俺は、人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年だ。

俺の人格は、人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年、だ。

人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年な俺は、
人が良く気配りが出来、しかし所々子供らしい好青年に相応の、
如何にもなとびっきりの笑顔を見せた。

「はい！ これからご指導よろしくお願いします！」

＊＊

／丁苞

「北郷や、ここからここまでの竹簡を土木の籠へ入れておくれ」
「はい。と、丁苞様、こちらの竹簡は酒の税率の分類ではございませんか？」

一週前に新しく入った儒子はくるくるとよく働く。

その上頭もかしこく、算術においては私も舌を巻くほどよく出来る。

出生はごくありふれた商家の三男だか、その教養の高さはお嬢様にも負けず劣らずといった具合だ。

これはとてもいい拾い物をした、としみじみ思う。

「おお、そうじゃな。ではその様に頼む」
「御意に」

礼儀作法も少々荒削りな部分もあるが、概ね出来ておる。

そして何より、学のある者特有の傲慢さが見られない。

私は武家の出生で文官になった為、あの無駄飯喰らいの名士共に散々バカにされて来た。

武家は武家らしく槍働きをすればいい、と何度言われたことか。そして決まって私を貶すのは、この子の様に賢く若い名士の人間だった。

四十年の歳月をかけ、私はそれらを出し抜き、張越様に一番の信頼を置かれる文官になった訳だが。

やはり今でも、私は名士が、さらに言えば賢く若い人間が嫌いだった。

それをこの儒子は感じさせない。儒子の教えにのっとり、決して能力を誇示せず、歳を重ねた先人達に謙った態度をとる。

そんな好青年を嫌いになれるだろうか、いや、なれはしないだろう。

「それが終われば一服しようかの」

「本当ですか！ あ、失礼しました……」

そして、まだまだ若いなど実感させる言動を節々に見せる。

今の様に、時折見せる子供らしい表情や、仕事の結果を労った時に見せる嬉しそうな表情に。

孫が居ない私に、孫が出来た様な錯覚を覚えさせる。

もし、彼が望むのならば義理の息子として家を継がせてもよいかもしれない。

「ほっほ、構わんよ。どれ、では北郷の持ってきた茶でも淹れさせて頂くかの」

「あ、僕がやりますよ。丁苞様はどうぞ座ってお待ちください」

「そうか、すまんう。ではお言葉に甘えさせてもらうとするかの」

うむ、くるとよく働き、さらに気もきく。

両親はこの街に居ないようだが、官職の私の申し出ならば相手も喜ぶだろう。

商家の三男坊など、大抵は兵役に送られてお終いである。

それが高官たる私の義理の息子になれば、相手にとっても喜ばしい限りであろう。

「丁苞様、お茶が入りました」

「ん、おお、そうか。すまんのう」
「いえいえ、これくらいお安いご用です」

自然な動作で頭を下げ、少し気恥ずかしそうに下がる。
その動作が益々気に入る。

「——ああ、そう言えば」

この儒子の入れる茶は旨い。

茶など高級なだけの下品なモノかと思っていたが、その考えを改めなければな。

しかし、茶を簡単に提供できてしまうこの儒子の親は余程の商人なのだろうか……。

「今日も、お疲れでしょうし、あの“疲れの取れやすい茶葉”を使わせて頂きました」

「おお、そうかいそうかい、わざわざ済まぬのう」

「いえ、これも丁苞様がお元気に過ごす為、御礼を言われる程の事ではありません」

本当に、良く出来た儒子じゃ。

しかし、この茶は本当によく“疲れが消える”のう……。

＊＊

「おはようございます、丁苞様」
「ん、おお。……北郷か」

儒子が勤め始め一月が経った。

并州の地は既に雪に埋もれ、本格的な冬がやってきておる。

そして歳の所為か、最近どうも調子が悪い。

やけに疲れを感じたり、目眩や耳鳴りが酷い。そして無性にイライラする。

やはり年には勝てぬということなのかのう……。

しかし、症状が重くなるにつれて、高北郷の持ってくる茶の効能が身にしみる。

あれを呑むと、立ちどころに目眩や倦怠感も消え、最高の調子が発揮できる。

「済まぬが、茶を入れてくれぬか？　ここ数日また調子が悪いのじゃ……」

「あ、すみません丁苞様。両親からの送り届けがなくて、今茶がないんですよ」

「な、なんじゃと！？　それはどういことだ！！」
「落ち着いてください！」

い、今私はどうなってたのだ？
怒りに駆られ、殺意さえ感じてしまったではないか……。

いくら調子が悪いと言えど、これはあんまり過ぎる。
為政者としても、一人の人間としても。

「すゝ済まん。今のは忘れてくれ」

「いいえ、私は構いません。しかし丁苞様、本当にお身体の方は大丈夫なのですか？」

「私のことは気にしないでくれ……。すこし落ち着けばまた元に戻るであろう」

そうじゃ、これは加齢が原因の体調不良。

茶を飲み一服入れ、しっかりと休息をとれば簡単に治る唯の体調不良なのだ。

「はあ。それで、茶のことなのですが……」

「そ、それじゃ！ 一体どうして茶が届かぬのじゃ！！」

「だから落ち着いてください！」

やはり体調の不良が深刻じゃ。

どうもあの茶のこととなると我を見失いやすい。

精神が不安定なもの、良くない気分をなおさら加速させる材料の一つになっている。

「済まぬ、どうも精神が不安定で……」

「いえ、お気になさらないでください。それで、茶の件なのです
が……」

「ああ、大丈夫じゃ。続けてくれ」

「その、父も商人でして。えっと、商売には浮き沈みが付き物でして」

「ええい！ 戯言は良いから早く言わぬか！！」

「も、申し訳ございません！！」

ま……またやってしまった。

いったい私に何が起きているのか。

ええい、どれもこれも茶が切れて居る所為じゃ！！

「謝罪などどうでもよいわ！ 要点を言わぬか！！」

「つまりですね……高価なモノをいつまでも無償で提供する訳にはいかない、と」

「それで？」

「はい、えっとですね。その、其れ相応の対価を払って頂けないかと」

クソ、イライラする！

この儒子はこのなにも要点を得ない無能者だったのか！

「分かった、払おうではないか。して、何を求めるのじゃ。金か、権利か？」

「……とある商店の、融通をしてさえいただければ。取引を致す事は必ず保証します」

「では、取引成立じゃ」

「はい、ではこの書簡に印を貰えますでしょうか？ 確認でき次

第、茶を持ちこませて頂きます」

「これで良いのじゃな！ 早く茶を持たぬか！！」

「御意に。では一両日中に」

「遅い！！ これより一時（約二時間）以内にじゃ！！」

「……御意」

これで、茶が手に入る。

＊＊

不調は一向に良くならない。

少量では効能が余り發揮されず、茶の量も増えるばかり。

茶も決して安いものではない故、出費は増えに増え、四十と数年かけ貯めた財はすでに半分程も解けてしまった。

そこに……追い打ちをかけるが如き一枚の書状が届く。

「は？ 今何と言った？」

「ですから、在庫の關係がありまして単価を現在から三割増させていただく所存です、と」

「な、それではとても手が出ぬ。どうにかならぬかのう？」

これは、依頼という名の脅迫。

私が一言声を掛ければ、約三千の兵が自由に動かせる。

そしてそれは、儒子が一番よく知っておる事柄でもある。

気に入っておった故、斯様な手は使いたくなかったのだが。
背に腹は代えられぬ、という奴じゃ。

「はい、畏まりました。……と言いたい所ですが。」

ひとつ、これを御覧に入れてもらえませんか？」

「ふむ、なんじゃ？」

金か、物か、どちらかと思った私の想像に反し、儒子が手に持って居ったのはただ一枚の書状だった。

「どうぞ、お読みになってください」

「……」

心中に嫌な予感を抱えつつ、私は慎重に書状を手にとった。
そして、目を通し……

「な……なんじゃこの契約は……!?!」

「なにをおっしゃるのですか？ 丁苞様ご自身が御書きになった
のではないですか」

あ、余りにもデタラメ過ぎる！

この様な認可を出してしまえば、矛先が向かうのは……。

「た、確かに書いたやもしれぬが！ こ、これでは他の酒家の経営
が成り立たぬではないか……!」

「そう言われましても……。それとも、丁苞様はご自身の成された
契約を破棄されると言うのですか？」

確かに、この契約をしたことも、印を押した事も覚えては居る。

しかし、斯様な無茶苦茶な内容だっただろうか？
あの時は茶欲しさにどうかしていたと思えぬ。でなければ、
この様なふざけた税率設定などする訳がない。

「ぐっ……、しかし、このまま酒を卸す訳にはいかぬ！ 税率が
十斤（約5kg）単価当り一銭など、ふざけたコトが出来る筈がな
い！」

「そうですか……、では残念ながら茶の販売契約も同時に破棄、
と」

「そ、それでは話が違うではないか！？」

「はて、契約書にはそう明記してありますが」

「なんだと！？ 金は払っておるではないか！！」

「時間があります、じっくりご自身の目でもう一度ご確認を」

（中略）

上記の契約を以て、高家は特別税率の受諾許可を与えられ、対価
として丁苞殿には茶関連の取引の席に着く権利を与える。

「ほら、ここに」

「そ、そんなバカな……」

わ、私が……この様な無茶苦茶な取引をしたと言うのか……？

「いいえ、現実です。ああ、それは控えの書類なのでどうして頂
いても構いません。

そして既に、二週の間 に渡ってこの税率で取引が行われており
ます」

「ふ……ふざけるなっ！！」

「では、交渉決裂ということだ」

「な、それは待て！ 大体、貴様が唆して行った取引じゃ！ 私

が訴えれば……」

「それはつまり、丁苞様が大間拔けな取引をしたと言う事を世に自ら知らしめると言うことでしょうか？」

「……っ」

それは不味い。

この様な失態、張越様の元へ届けば、信は失墜しここぞとばかりにやり玉に掲げられるだろう。

……生憎、私には敵が多い。

「……はっ、ま、まさか……！！！」

「ええ。ご察しの通り。貴方の反対勢力に持ち込む手筈もすでに整っております」

「なんと……。すでに四面楚歌ではないか」

「——さあ、ご決断を」

私には、既にどうにもできなかった。

この餓鬼は、一体何を企んでおるのか。

隠していた牙に今更気付いた自分が、どうしようもなく間拔けに思える。

「……分かった。茶の値上げを許可しよう」

「では、契約成立です」

＊＊

「……報告に、参りました」
「言え」

「滞りなく、遂行中です。依存度は着実に上昇し、既に半廃人と化しております」

「……良くやった。そのまま続け、代理として州牧に接近させろ」
「御意。それともう一つ、お耳に入りたい事が」

「何だ」

「教育係、及び乳母と名目上の生母を引きいれました。婚姻の件に關しても滞りなく進んでおります」

「ふむ、予想より早いな」

「このまま進めば春までに太原を支配下に置くことが出来るかと」
「良し。そちらも進めろ。但し高順（一刀の姓名）には知らせるな。」

ふん、あの餓鬼は張遼との繋がりを作っておきながら、情を移した腰ぬけだ。

「こちらを知れば余計な動きをしかねない」

「御意」

悪意は、一刀の知らないところでも、確実に全てを蝕み始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071x/>

真・恋姫?無双 霞√

2011年11月16日20時23分発行